類聚名物考

廿四

和書門

類

二七七九八 號

一一二 函

一 架

一六一 冊

内閣文庫

和書 類

二七七九八 號

一六 冊

二〇九 函

一二 架

(七三部)

内閣文庫

番號	和 27798	
冊數	156 (37)	
函號	209	106

国立公文書館
National Archives of Japan

地理部 九 十

全

類聚名物考

二十四巻

明治十三年謄寫

国立公文書館 National Archives of Japan

類題和歌集　二十四巻

日本政府圖書
内閣文庫

名物
山部
地理九之十
イロハニホヘトチ
リヌルヲワカヨタ
レソツ子

○伊字部

絲鹿山　いとかやま　紀伊國
いとかの里

○萬葉集 第七　作者未詳
足代過而糸鹿の山の桜花ちらすもあらなむ帰りくるまで

○夫木抄 第三　源仲正
ありあはゝ糸鹿の里のいきまちにすゑんとすれやちる花もなき

礒山　いそやま

○夫木抄　口

萬の尾のあまの塩焼いとまあれや礒山桜かざす海人　月清集　夫

○百首御歌

あしのやのあまの塩屋にあるハいそ山桜浪よせかすらむ　光明峯寺入道摂政

夢山　いめのやま

○但来文集五　峡遊雜詩夢山　甲斐

誰把華曆国裡山移来城北傍雲関箇中安得逍遥枕應
有路従三嶋還

石邊山　いそへのやま　未勘　近江國

○猿地吐懐編上　石辺山

夜衣引手も涼し择ゟいそへの山のまつ乃志らへの世

右萬葉第十一人丸歌集に出たる歌の中に

白きゆみ石辺の山乃ときハなる命なれやもこひつゝをらん

此歌をとるよしある時歌前段近江の名所をよみ来る中に

つまれたり今の人ハ近江也の原宿をたどり遊けるおもむき

彼集にみえたれハ近江ならの方ともよめる中よ人麿乃

なるよめるへきを出せるれけるはや式ハ非体歌さまと云

事なし

石寸山 万葉　いそんのやま　近江

磯邉山　いそべのやま

○金槐集 中 恋　○新勅撰集

志らま弓磯へ乃山の松の葉のときはにものをおもふころかな

○万葉集 十一

白まゆみ磯へ乃山のときはなる命なれやも恋つゝをらん

岩戸山　いはとやま

○曽丹集 冬　○夫木抄 第廿　曽根好忠

いはと山つゝてうけて祈らし榊打しなへとおけるあられかな

○名所補翼抄 第一 契沖　右夫木第廿にハ作者を読く
正三位知家公とせらる花名寄に曽根好忠とあ
是を用ゆ 曽丹集に冬十首の中に入てかけ
なとあり いはとやまを第四句さかきハおしなへとなり
夫木抄にも第廿六冬一聚の部に家集好忠として
あり いはとやも第四句いつ紀打しなへと有いへる
誤れり

夫木抄廿　正應大嘗會　民部卿資宣

榊とる今も石戸の山かつらふかくひかけやそのまさき那

源雅光朝臣

日本十二

岩戸山明ぬも志らて鳴鹿ハ尾上の雲の妻やまとふる

○此うたは岩戸山にあつて天の岩戸の故事ならんと見る家あり

まきれやすし　よく出来

○雪玉集

何○さへ岩戸の山も見えわかしめさせてあまる照れる夜哉

新勅撰

久かたの岩戸の関もあけなくに夜半に吹しく秋の初風

岩戸山よにあけてゆく冬の夜の天の関守誰か忘れん

○玉撰集

いは山まさりてうた人はかたくて

岩戸山　いはとやま

○夫木抄一　百首歌山立春　正三位知家

岩戸山天の関守いまはとてゆるす雲井に春ハきにけり

巖山　いはほのやま

岩ほはいは秀也岩の高く秀て大なるを云　秀をほと訓ハ秀倉を万葉集にほくらとよめり　社をほくらと訓も又言ほ草の花を秀といひ若葉秀を月合するへしハ花の咲て出るをも穂に出るとも稲の実のなるをも秀といふも穂なり　何れもいふ詞也

○夫木抄　橘俊綱

君か代ハ長居の浜のさゝれ石岩ほの山と成つくさまて

いやたか山　弥高山　いや高きとも　近江

○日上拾遺集ニ大嘗会風俗ニ見えたりハ近江にもいや高
の岸けりと有

○清少納言記　岸いやたかの山◯

○夫木抄　元輔
さゝれ石の岩ほとなれハ近江なるいや高の岸弥高となる

日
蝉の声いや高山のこのもとや旅ゆく人の宿りなるらん　匡房

枚倉山
○夫木抄
いくらやま　匡房　近江

枚倉山　いくらやま　近江
○夫木抄
早引の枚倉山の岩ますもつみかさねたるをハ嬉しき　匡房

石山　いしやま
石山寺　いしやまの橋　筆あり

○清少納言記　寺ハいし山でら

○源重之集
冬くれハつらゝやまさる石山の谷ハかくさき抱とむるらん

○明玉集　法性寺入道関白

かくしていつかハきえん朝衣の袖あらき剝か石山の梅

谷寄ニ廿一首ハ東三条院石山ニ詣すふとき

○赤染衛門集　秋石山にまうてゝ

まつこふる声をもしきおれていかなるらんちつハやし

はらこそちたちよ殿谷の猿の鳴しを

あかりあきたひと八独をやむつ木をもおれハ猿も鳴

○赤穂集

色まふハなきを雛みいつ山にまちやるあひのひくしえしらん

入佐山　但馬　丹波歟

式云出石郡

いるさの山　いるさの糸日糸を

○六帖

我せこをいるさの山の山あらゝき手まかすあれハこひもするかも

○夫木集

梓弓末の霞ハへたつれと入さの山ハ月そさやけき

○源氏物語末摘花

里わかぬかけをハ見れとゆく月の入さの山を誰かたつぬる

花宴

梓弓いるさの山にまとふかなほのみし月のかけや見ゆると

○夫木抄第八　郭公　百首御歌　後九条内大臣

月影のいるさの山のほとゝきすとひくる人やきくらん

照射　御集　法性寺入道関白

同第廿　平祐挙

入さ山おなしかさしハ何なれやみちし雪にハまかへけれつ

同第　顕豊

夕つくひいるさの山に時しまれあえてなく郭公かな　経家

良玉集　名寄　源兼淵

梓弓まつの日くらし引つれているさの空にまといそせむ

梓弓いるさの山にまちしまて康待にまに明かしのゝめ

生田山　生田川　いくたの森　生田浦　いく田の磯　摂津国

○六帖

時の世乃生田の山のいく度か我いくたひかなくらん

○夫木抄廿　衣笠内大臣

あきされハ生田の山の色めくらし色かはりてもまてるらん

伊豆雄山　いつのを嶋山　伊豆

を山にかと大をの二つあり男山ハ大山をと山ハ小山也

○未撰集

ちふつとひくるかしこき君もといつの御山の花ちるらん

○金槐集　走湯山参詣の時　○夫木抄廿六　鎌倉右大臣

ひとつもの中にもちひて出る湯のいくの和山ともいへり いひけり

伊駒山　いこまやま　生駒 膽駒　大和　平君郡

伊勢物語に業平ゆきかよひし河内の伊駒山に雲のかゝりたるをみて詠めり大和河内の堺にある山なり物語には此歌のみ事多し

万葉集第十第十二第十五二首第廿寄物猶山秋葉集にも出れば此山の歌多き

○伊勢物語

いふ
きのふけふ雲のたちまひかくろふは花の林をうしとなりけり　業平

○堀河院後度百首　兼昌

い駒山たなびく雲のまよりいそくもちてさらきたちけり

○千五百番歌合　宮内卿

雲かゝるい駒高ねの月落て三輪のひばらにましらなく也

○名所補翼抄第一　奘仲

大和の国平群郡なり三輪ハ城上郡なり

生駒ハ平君郡にて三輪よりハ遥に西なり三輪の檜原に猿をよめるハいかにぞ秋の枝なれども生駒の上より月ハ落ぬべき女性の方角をも考へずしてよめりゆかりなきよし大和にて東西に一方たがへりそれハ書思ひて歌合せし上なれわかきにありしなり

作者未詳

日万葉集第十

妹がりと馬に鞍おきていこま山うちこえくれバ紅葉ちりつゝ

万葉十二

君かあたり見つゝもをらん伊駒山雲なかくしそ雨はふるとも

万葉十五

夕されはひくらしきなくいこま山こえてそ我くる妹かめを欲り

妹にあはすあらはすへなみ岩ねふむ伊駒の山を越てそ我くる

○南郭文集 初編巻四 猗蘭藤侯西臺八景分賦伊駒白雲

崚嶒雲満伊駒傍太守登臨爽氣長南海陰晴従変
態西臺日月送餘光山寒似掩秦皇牒秋色還揺漢
武章詞應堪淹五馬風流憶昔在中郎

磐瀬山 いはせやま 大和国高市郡

磐瀬 雑部 いはせの森 未詳 石瀬河 川部 此歌各有部

又云 作し 磐瀬ハ地名なれハ雑部ニ入 いはせ 等之委出記也

来て

○只恰

我をのみいはせの山にこゝろなけきしくよしもえぬかなり

稲淵山 いなふちやま

清少納言記に淵は稲淵といふハ川の名なるを稲淵山といへハそこよりある山なるへし稲淵の滝もこれにちかきにあるにて稲淵淵のあなたハ何にして地名也名をとり知へし此哥多し

夫木抄
秋はきぬ猪瀬山のきり〳〵す声よわりゆく暮ぞかなしき　具氏

石村山　いはれのやま　磐余　大和国　十市郡
石村野石村道なと万葉集巻三巻十三に出て磐余と同しく
これと訓へきを誤りていはむらといへりその上に大和の
彼岳はそのまゝいはむら山とあり後人今二つ有るごとく
して古今を考しも雑部いはれの条磐余の下に委しく記す
○万葉集巻三
つのさはふ岩村山にしろたへのかゝれる雲は大君にかも
○名所補翼抄一磐余万葉集巻三春日蔵首老歌也巻十三

作者未詳　歌　右見ゆる方より〳〵三首　いはれを石村と書た
るを誤りていはむらと点し来れり日本紀に石村池辺宮御
宇と書りまた日本紀に継体天皇の宮をば磐余玉穂宮と
かけるを仙覚の万葉集抄に引き遣たる常陸国の風土記に
石村玉穂と云り見えたりと記すとも
某伸述之

石根山　いはねやま　近江
岩根の峯　いはねの池　岩根の森　いはねの村
見峯の歌共は日本紀の名その部属に出す
○夫木抄　雑
行末は今ぞ久し君が代は岩根の山のいはねの松
久しきのしるしぬへし栄えゆく岩根の山の松のことくは

伊香胡山　いかこのやま　近江

いかこ　伊香胡海　いかこの池　いかごの浦　伊かこ崎

筆何も志かしるしらす　いかごハ河内にも同名あり又上野の

ｌもまて伊香保神社等もあり又いふべきことふかし

がれハきこえやすし　伊香胡　雑部ハ字の差を変ずる故

万葉集第八　笠金村

いかご山野べに咲たる萩見れハ君が家なる尾花し思ほゆ

○同第十三　長崎　作者未詳

つきたちきやをぬきおて　いかご山いかに我せんゆくへしらずて

石蔵山　いはくらやま　山城　近江

○拾遺集　神楽　岩蔵野

動きなき石蔵山に君が代をはこびおきつゝ千代をこそつめ

ふもとハ石蔵山にて万代を動なきことをつまんこそおもふ

○勝地吐懐編上　石蔵　拾遺集神楽二首

右二首初ハ安和元年大嘗会風俗歌後ハ天禄元年大嘗会

風俗歌共に近江国蒲生郡なる石蔵山をよめる歌なるを

さくよみせしハ誤りし

○新勅撰集　賀

足曳の岩蔵山の日かけ草かさしてまゐる神のみことつとふらん

○勝地吐懐編上　右此歌の上に貞応元年悠紀歌主基とて

歌あけし主基の風俗岩倉山とて歌を上げ下此歌にて

御屏風の歌岩蔵山とあり悠紀方ハ近江なれハ是も悠紀方の

御屏風の歌にて上げし岩蔵山に同し　○花論注とせられ

と石花の小野の秋津に入まつくらん
是ハ万葉集第七 寄雲歌に
石蔵の小野ゆ秋津に立わたる雲にしあれや時をしまたん
小野ゆハ小野よりといふ古語也 石倉山よりとして立て此歌
を取て續れて秋津野とも 秋津川とも 讀る所にて大和也
吉野郡にあれハ石花小野も同所なるへし 野谷雄に高市郡
石椋野社を高市郡を吉野郡とハ續たり 依て秋津に立
いつるとよめれハ吉野とおもへ今此に入られたるハ誤也
此歌の本歌の石やうもんなるへし 出来ぬも後九条内大臣
御歌に
時雨して庵ハ晴て岩花の小野の秋津に月も入くる
此御歌而同し
歌 梶井宮尊雅成親王の御歌に

岩花の小野を立出ぬれとも是ハ秋のくいハ猶時雨らん
此御歌ハよく本歌に叶へり
○今按するに此によれハ近江山城大和の三国にあり
その歌によりてよきを知へし 岩蔵ハ山城とあれハ
よく所聞ハ 近江大和を用へし

○洛所遺集四 五月十七日 遊岩蔵
洛北羣山通一蹊、岩藏幽致信堪顧、尚餘石坐
明神跡、只負空名朝詠渓、佐理書扁今尚在
臥雲夢語遠應誓、帰来背却好風物、復墮
人間醉如泥

伊吹山 いふきやま 下野 近江国坂田郡 美濃

類字名所集ニ近江と出せり 顕昭か説ニよれハ下野の方ニ有ハ名所

○拾遺愚草上

冬深く野ハなりにけり近江なるいふきの外山雪ふりぬらし

後拾遺上

かくとたにえやハいふきのさしも草さしも知らしなもゆる思ひを

袖中抄第二云 此いふきの山ハ美濃と近江のさかひなる山也 何とて下野の国ハ伊吹山と 能因か坤元儀ニ出せり 実方の歌九首ハ悉く下野の伊吹山の歌也 六帖ニ

何ちきるなや伊吹の山のさしも草おのか思ひニ身をこかしつゝ

なかなかにいふきの山のさしも草さしも思はぬともやいはぬ

下野やしめつか原のさしも草おのか思ひに身をやたくらん

清少納言ニ まことや志もつけへくたると云ける人ニ

思ひたにかゝらぬ山のさしも草誰かいふきのさとハつけしそ

是ハ清少納言ハ下野へくたらんと定めけるときしける人のとひけるによめる歌也 是ニよりて六帖の歌を加へし しめちか原の 清水観音の御歌とて新古今ニしめちか原のさしもくさも何なと同し 是も伊吹山の続歌なるとそや

○清少納言記 山ハいふきの山 近江

○六帖 よみ人志らす

まさしくと人ハいふきの山おろしのまさしくもかくれさしも草なとこそ

いかにきつゝあやいふきの山のさしも草 おのかおもひに身をこかしつゝ

堀河院御百首

秋かせといふきの山のやまおろしの 秋深しく吹つゝあると 仲実

山家集

木のもとつかにいふき 嵐の風吹は 稲妻はいかにやさしも見えん

くれねは稲妻いつゝけさかとそ いふきの嶽は雪 ふるらん

○夫木抄 六 定家

色まもせてう河らふまゝとやれるもえやいふきの山吹の影

○名寄 社 長家 俊頼朝臣

人ことも世をもうらみしといふきの寺下草の志をもきこえひ

同 現存六帖

ちえまさるいふきが嶽の山おろし 氷まてつる湖の浦浪

○今案 是集には近江歟と 近江

○拾遺愚草

秋をやく冬そこんなりいふき山 きこえてなきかさの

ささまとやなれはいふきの峰高 河へなわたてえなる山藍え

○近保百首 知家

つくしとや誰かいふきのさしもくさ まさるもえてもゆる山端月

○未木抄

おもひあるといふ吹の山の末遠はさすかせまつ雲も下にえんくらし

○今案に此集には那智をよめる此外美濃の国
にも又同名あまた次にあり
美濃国

○後鳥羽院御百首　秀能
雪とつもりておろせ伊吹の山風に弱りあへつゝ宮の前川

○夫木抄　範家
春の風さえまさる伊吹の山颪に花ぞちらする宮の前川

康光
吹すさふ風にいふきの山の雪を残さず出て関の前川
是等は美濃の玉前川をよみ合せられいまたしき
まきらはしきなり

妹山　いもやま　紀伊国　拾遺集
拾遺集を案するに妹山を見るとせるは此歌もと万葉集
第二巻の歌の妹背を詠めるなれは此拾遺集の歌にも見えたる
をよみかへて妹と背とを分て詠し紀伊国に妹山
背山とて二山の名ありつゝきて妹背山ともいへり

○拾遺集　読人
いも山の岩根におけるわか衣をもすてゝ妹かまつらん

○続吐懐編 上　家持を出して詮する此歌万葉第十二に入
妹山のとかれは彼岸にもと妹山ありといへり

○南紀名勝巻

妹背山　いもせやま川　紀伊国　伊都郡　那賀郡　未詳

大和吉野にありといへるハ偏にさきに二の山の名にして正
の名にはあらで妹山背山とて両を一つに續きてよめるなり

○古今集　　戀五

流れてハ妹せの山の中に落る吉野の川のよしや世の中

○揣摩吐懐編　　古今集此歌を出して注云

先妹背山ハ妹山と背山とふたつ川をへだてゝいへり万葉集
背の山をよめるもあり妹の山とすり紀の川を隔て又山ハ
和州妹山ハ東にあり紀の川ハ吉野川の末なれハ流れてハといへる
其中に落る吉野川といへるといへり妹背川も紀
の川の地名にて二の山のなかを流るゝの別名也と知
るへし妹背山吉野山に在る様に讀る歌ともハ万葉をよく
見ず古今の歌に流れてハとよめる心をしらさるなるへし

○今案に吐懐編にいもせ川の名を云て古今の歌を
出されしハ今古今の歌まてハいもせ山にて妹背川とは増
若乃歌を誤まるまて

○蜻蛉日記　中巻
尚待のかんのとめまり流るゝしけりしに
いもせ川昔ならし此中なりハ人のやきつれかけハ経て
清すまハ
よしや身のいかせんなれきハ妹背山中にたえの名かけり

○清少納言記　　山ハいもせ山

くだる妹背の山の中なれハ吉野の川とよし

○うつふ物語　[illegible]

いもせ川よそになかめし宿なれと涙も猶流れつる哉

○源氏物語　藤袴の巻

妹せ山ふかき道をハ尋ねすてをたえの橋にふみまよひける

惑ひける道をハしらていもせ山
たと〱しくそ誰もふみ見し

○狭衣物語　巻三

行かへり心もとなき妹せ山思ひしるへを尋ね侘しや

○伊勢集

三吉野の山の下風寒からし妹背の川に浪高くこゆ

○清原元輔集

かつ見つゝ渡るとそなれハ行かへりいもせの山をもこえぬる

○夫木抄

もみちはゝおもしつゝきの妹せ山紅葉の江ハいつきそめけむ　輔親

口廿三

諸ともにわかなをつまん妹せ山山田乃沢のゑくもぬるめり　俊頼

○名寄

妹せ山細谷川を帯にして雲の衣けさやきるらん

○夫木抄　清輔

春くれハすその野の桜の梢まて妹背の山やあさ名立らん

○方輿集　　　　　　　　　　行家

妹と背の山ハ中に生なから玉ちの一よも見てこそあらまし　多れ

○南紀名勝志

○雑和集　上　四十三右　廿九　いもせ山二首

○万葉集第二　元明天皇号阿閉皇女時御製

これやこの大和にしてハ我こふる木路にありといふ名におふせの山

同第三　丹比笠麿

たくひれのかけまくほしき妹の名を此せの山にかけハいかにあらん

春日蔵首老

よろしなへ我せの君かおひきにしこのせの山を妹とハよはし

同第四

おくれゐて恋つゝあらすハ木の国の妹背の山にあらましものを

同第七

麻衣きれハなつかし紀の国の妹せの山に麻まけるきミ

同

おほなんちすくなみ神の作らしし妹せの山を見らくしよしも

同第七

わきもこに我恋ゆけハともしくも並ひをるかも妹と背の山

人ならは母のまなこそ　麻裳よし紀の川のへの妹と背の山

背の山にたゝにむかへる妹の山ことゆるせやもうちはしわたす

紀路にこそ妹山ありといへ　玉くしけ二上山も妹こそ

ありけれ　妹にこひ我こえゆけは背の山の妹にこひすて

あるかともしさ　山と云　妹かあたり今そ我ゆくめのみたに

我にみえこそことゝはすとも

口第九

背の山にもみちとこしく神岳の山の紅葉はけふか散らん

口第十三

木乃国の濱によるといふあはひ玉ひろはんといひて

妹の山背の山こえてゆきし君は

因幡山　いなはのやま　因幡國法美郡　一説美濃

立わかれいなはの山の峯におふるまつとしきかは今かへりこん

○勝地吐懐編上　新古今集に因幡法美郡稲羽の名見えたり文徳

実録斉衡三年正月行平因幡守となりしは其時の

事なり　六帖にまつとふ歌に入たるは武蔵の

野のゆゑの名を山とを同しくするなるへし

新拾遺集　秋の田のかへりこれたに

藤原相如

風のつてにも聞かしいなはまつらん秋の風の

なれは

○續無名抄 中巻 一所引時中 濃州稲葉山ハ今の岐阜也又因幡
有山名因幡山有松ニテ因幡山ハ今の岐阜より東ゟ
けふ而るゝ高山とふ地なり風景よくれたる山にて松も
まゐりてをり宗祇の説也今も云ゝ旋観せしら
さや昔となりぬ

先年行幸の年禁裏和歌の御題濃州稲葉山松と題
出ぬ年と四字の題ハ烏丸光廣卿因州の牧ナ将度ふ
かそしてよませられし山御歌
岩やおふる松のちよ無残[illegible] 君ハ千世ませ[illegible]の
五文字云々 とこれやん詠りぬ

稲葉山 いなは山 美濃
○續無名抄 中巻 二所引時中 濃州稲葉山ハ今の岐阜也こし
因幡有山名因幡山有松ニテ因幡山ハ今の岐阜より
東ゟとけふ而るゝ高山とふ地なり風景よくれたる高山
にて松も又ふりておりしと宗祇の説也今も云ゝ旋
観せしらさや昔となりぬ
○いなはの山
日本大抄ハ文治二年五社百首題村 俊成女
○[illegible]も志家のうちに[illegible]のとまりていなは山を分
[illegible]

○揖保山　いほのやま　播磨国　揖保郡

いほの浦　いほの濱　揖保湊

延喜式ニ　いほノ十粒と出ル

○名寄　松葉集ニ　同し

立かへりとしまて神の光きいいほの山なかくそ有ける

岩戸山

いはとのやま　○夫木抄八　夜

○曽丹家集　好忠

行ゑさし岩戸の山もえくねてしめときさもあけはなるゝ夜

窟山　いはやのやま　備中

○名寄　清輔

神やまにいのちのかしこみ動きなき志るしとこそ窟山かな

○名所補翼抄　六一　長仲　此哥大嘗會主基方哥ト

壽永大嘗會清輔朝臣詠悠紀方哥ハ雲御抄

ニ主基作者無所見古時哥ヲ可證

岩陰山（蔭）　いはかけやま　山城

○長秋詠藻　俊成

君とみれは名をそいふ照日うつす岩蔭山も卯の花

稲荷山　いなりやま　山城　神祇郡甫お

○清少納言記　神いなり

○紀貫之集

稲荷のゝ神さへなくはいなり山まつの葉すさかなれなん

同
真実立隔てゝ稲荷山こえ行道の人まちまはなぬ

いつはりといはぬ郷の稲荷山こゝろはしらは神やしるらん

○大中臣能宣集

ちはやふる稲荷の山の衣きし花の何くはかはし稲や

○藤原元真集

いなり山山のしるしもすゐしはなくて君之影さへあまつらむ

同
廿二日いなりよまうでてよめる

ちはやふる神の社にいのりくる我の祈をくむおもあはれなり

○伊勢集

いなり山ほかの杉人は君の代をいのるといのるやいはせぬ

○源順集

いなり山尾上にたてるすぎくにもかゝる人の後ぬりなる

○曽丹集

いなり山こえ行く人をすぎにしてはふぐといはせむ

○清原元輔集　きゝくみ侍りし人の稲荷にまうでゝ出て
まうしとつかはしける
ことかけにいのりかくとも今更に立かへりぬる沖津白波
○古撰集
ことはりやいのりしをなんいなり山ふは絶せぬすゝもがならん
○蜻蛉日記　まうしものこ社に
いちしるき山口ならはこゝなから神のしるしをみせよとそ思ふ
中のに
いなり山おほくの年をこえぬる祈るしるしの杉をたのみて
末のに
かみくとのほりくたりはわふれともまたさかゆかぬ心ちこそすれ

○壬生忠見集　二月初午にいなりにまうでゝ
かゝるとこそ杉をいのりすとそふする君かさかへしるへき
○古今和歌六帖
いなり山杉の村立おしなへて木のもとことにくるよしもかな
○夫木抄　二十六　忠家家集に　いなりの瀆てよめる
中の社
いなり山みつのさかきにます瀆つゝきをたのみていのるかひ何逝
赤染衛門集に正月いなりのいつさき佳人まうてと
のならしいはいふ菜をおこせりしに
東日野のいなりとこえ六にひしよいなりの山の杉もつらし

日十三　和泉式部集にいなりにまうでて御前なるかうらき
庚の下に
こふとしつるまなくいはとしもかくもやまのかひよとせさん

同十五　稲荷明神の時　周防内侍
いなり山杉の木ずゑも来てみれば青き青なる縁となりけり
村鳥本末の序といひしるして稲荷の杉をやまふかけてなく

五幡山　いつはたやま　越前　敦賀郡
五幡神社　いつはた坂
○延喜式　神名帳
○清少納言記　山はいつはたやま

○万葉集巻十八　大伴家持卿
かへるまの道ゆかん日はいつはたの坂に袖ふれ我をし思はば
○夫木抄　範綱
かきくらし越のかへる道路雪まさ五たて山路せはこそやま

磐石坂山　いはさかやま　丹波
○夫木抄巻廿　具氏卿
故まうす紅葉せり岩坂山の梢は今や染らん
同　詠人志らず
鹿のすむ岩坂山の姫小松千代のためしの志るくなるかな

磐代山　いはしろやま　紀伊国　日高郡

岩代　濱　森　岸　ニ在

○夫木抄 六　熊野ニ参りける時　平忠盛朝臣

神代より結ひ初めける[illegible]岩代山に[illegible]

磐城山　いはきやま　同

○六帖

いつくとて年をしいはゝ岩木山君か心のなれてこそ[illegible]

市野辺山　いちのへやま

○太平記ニ　足羽軍事ニ山法師八百余兵左右武者余き騎の

前の方つれまし市野辺山の麓をまとを出でて通り[illegible]へ向ふ

花形やま　花山　山城国醍醐　宇治郡　又云　名所

○拾芥抄　慈恩寺　東山寺号花山

○今昔物語廿二　盗織[illegible]歌の[illegible]て[illegible]山科ニ至て[illegible]慈恩寺の南大門を[illegible]て[illegible]山

を[illegible]河原[illegible]

○拾遺抄云　花山ハ山階[illegible]元慶[illegible]陽寺[illegible]

花山院ハ彼寺ニ御出家[illegible]御出家[illegible]号花山法皇

後ニ[illegible]法[illegible]花山院と号[illegible]遍照僧正

彼寺[illegible]花山僧正也

○夫木抄　文永八年毎日一首中

きりこえて[illegible]　[illegible]

咲とききて見にこしやまこえて峯の花を見る山さくら

○名寄　　光俊

かくさくら咲ぬる春の花山をあとなくふみ見て人やなかるらん

○夫木抄曰　家集百首中　源有仲

春霞うちかきこもり絶まより夕波志賀し志賀の花山

此歌は近江の志賀郡にある山をいふか非名所歟

花の山

○夫木抄五　雑題三百首歌　鎌倉中務卿みこ

いかにせん嵐のさそふ花の山心しとめてかへるかりかね

花咲山　たきさくや　上

○六百番歌合　春　五十四番　左　定家

あらはれぬ光のとはに霞みてはよし花さく山は雲とかくるる

端山

○源重之集
つくは山は山しけ山しけれとも思ひいるにはさはらさりけり　○新古今

○藤原忠能集　柳
花桜ちりしはきのふ青柳のは山もけふはみとりそなひく

○夫木抄八夏　正治二年百首　俊成
我恨はは山の霧に志かのなくこゑまてもあきの始に

はこやの山　藐姑射山　はこやの山　哥林拾葉五

○万葉
心をも無何有の郷におきてあらははこやの山を見まくちかけん

○拾玉集六　略秘贈答　○同日吉法楽百首　春也
きみかこゝろはえまさも久しかれはこやの山の松の村立

○鴨長明　百首　祝
いろかせる雲井のうけたまはるかしはこやの山をさしまつるこそ

○金槐集中　太上天皇御書下預時歌
ひんかしの國にわかをれは朝日さすはこやの山のかけとなりにき

俊成卿

百千度うら鶴の子ハかへるともはこやの山ハ老ぬなるへし

○列子ニ黄帝第二列姑射音夜山、在海河洲中、山上有神人見山海経焉、吸風飲露不食五穀、心如淵泉、形如處女、不偎不愛、仙聖為之臣、不畏不怒、愿慤為之使、不施不恵、而物自足、不聚不斂、而己無愆、陰陽常調、日月常明、四時常若、風雨常均、字育常時、年穀常豊、而土無札傷、人無夭悪、物無疵厲、鬼無霊響焉

○荘子巻一逍遥遊 連叔曰其言謂何哉曰藐姑射之山有神人居焉肌膚若氷雪淖約若處子不食五穀吸風飲露乗雲氣御飛龍而遊乎四海之外其神凝使物不疵癘而年穀熟吾以是狂而不信也○陸徳明音義姑射徐音夜又食亦反李賓夜反山名在北海中

○千載集序藤原俊成 我君代をしろしめしてたもちはしめ給ふとを経し年より百しきのふるき跡ハ紫の庭玉の臺千世久しかるへき御すみかとみかきおき給ひてはこやの山のしつかなる住居ハ青き谷菊の水万代すむへきさかりとしの泣めなり

○箱根山　　相模国足柄郡

○細川幽斎狂歌　もこ手やま

四里 志りのあるまき谷の銭ハ免れてきにくく 二里 なる箱根山を

○或人の歌

箱根路の志り文四里(シリ)をこえ人法(?)つさみへ(?)まてハむき(?)

○いさよひの記 阿仏尼鎌倉下向の記 伊豆の国府と云所にとまる いまた

夕日のきはに三嶋の明神へまいるとて奉歌

尋ね来てわかこえかかる箱根路を山のかひあるしるへとそ思ふ

廿八日いつの国府を出て箱根路にかかる いまた夜深かりけれハ

玉くしけ箱根の山をいそけとも猶明かたき横雲の空

阿しから山ハ道遠しとて箱根路にかかる也けり

○本朝遯史

○万葉集　第十四　東歌　作者未詳

阿しからの箱根の祢ろのにこ草の花つまなれや紐とかす祢ん

足柄の箱根の山に粟まきて実とハなれるを阿はなくも阿やし

○人丸集

足柄のさくらきれゆきん玉くしけ箱根の山の阿らん阿すこそ

○新撰集

明けぬるのみかおて箱根の山ふたこえも越出てたちぬる

箱根山明れいそきしたのしるしいつかハあふと志らぬ　箱根社僧

ふたらなき色に入て箱根山弟も山秋も思ひもかけさきなん

禅山のかしをくらへてさうなおいこちてきる寺の葉も(あしからの郡)

○藤原元真集
風ふかハ箱の山に夜更にきて我まつらんそめよ

○万葉集
箱の山ふたこの山も秋ふかみ明くれ風に木の葉ちりかふ

○六帖
秋の夜の月の光し清けれハ箱根の山のうちさえそする
よみ人しらす

○堀河院初度百首
箱の山うすむらさきのつほすみれ二しほ三しほたれか染けん
大江匡房

○方興集
ちるさくらおくらんそのと箱の山明れハむかさくの霞
顕仲

○夫木抄
あつまゆる箱の山を詠へつゝ明れハ雪の峰川もらん
俊頼

伊豆ぬかた箱根の山の時鳥二声とてや鳴てさらなん
顕昭

つきもこゝろ箱の山の糸桜誰山ある花をさくらん
宗尊親王

日本紀
箱根山さかゆく程の女郎花風の吹来の里に咲らん
為家卿

日 廿三
箱根山さきに越て枝の末葉の旅の路すか

玉くしけ二子の山の峰ふくかせ浦まて来ても月うら

○金槐集下
箱の山の峰風ハ紅葉をとけて山もしそすれ
鎌倉右大臣

○新葉集
我東ふしにつゝおる足柄や箱の雪を見る
後村上院御製

○活所遺藁　巻二　筥根関折楓枝

百般覇業似要詩、馬上臨眺到処奇、亜相梅関非我事、倦遊時折一横枝、

同巻六　筥根道中用前韻

眯目侵肌路上埃、何時懐抱十分開、人甘老死未曽悟、孿子山南百往来、

羽黒山　はくろ　出羽也　黒山

○奥細道　芭蕉陸奥記行　六月三日羽黒山に登る　図司左吉と云者を尋ねて　別当代会覚阿闍梨に謁す　南谷の別院に舎して憐愍の情こまやかにあるじせらる　四日於本坊俳諧興行

有難や雪をかほらす南谷

五日権現に詣　當山開闢能除大師はいつれの代の人と云事を知らす　延喜式に羽州里山の神社と有　書写黒の字を里となせるにや　羽州黒山を中略して羽黒山と云にや　出羽といへるは鳥の毛羽を此国の貢に献ると風土記に侍とやらん　月山湯殿を合せて三山とす　當寺武江東叡に属して天台止観の月明らかに円頓融通の法の燈かゝけそひて僧坊棟を並へ修験行法を励し霊山霊地の験効人貴且恐る　繁栄長にしてめてたき御山と謂つへし　八日月山にのほる　木綿しめ身に引かけて宝冠に頭を

包み強力といふ者に道引れて雲霧山気の中に氷雪を
踏てのほる事八里更に日月行道の雲関に入かとあやしまれ
息たえ身こゝえて頂上に至れハ日没して月あらはる笹を
敷篠を枕として臥て明るを待日出て雲消れハ湯殿に下る
谷の傍に鍛冶小屋と云有此国の鍛冶霊水を撰て爰に潔
斎して劔を打終に月山と銘を切て世に賞せらる彼の龍
泉に劔を淬とかや干将莫耶のむかしを慕ふ道に堪能の
執あさからぬ事しらる岩に腰かけてしはしやすらふ程三尺
斗なる桜のつほみ半ひらけるあり降積雪の下に埋れて春
を忘れぬ遅桜の花の心わりなし炎天の梅花爰にかほる
かことし行尊僧正の哥の哀も爰に思ひ出て猶まさりて
覚ゆ惣て此山中の微細行者の法式として他言する事を
禁す仍て筆をとゝめて記さす
○湯殿山は神名帳出羽に羽黒山と云社有飽海郡に月山神社在

羽易山　　はかひのやま

○万葉集巻二　長歌
大鳥の羽易の山に我恋る妹はいますと人のいへは　作者未詳
同巻十
春日なる羽買の山ゆ佐保の内へ鳴行なるは誰呼子鳥
○拾遺愚草
鵲の羽かひの山の嵐のたえゝには衣手のうへの月
権僧正公朝
○夫木抄
春の来る夜のまに佐保路なるはかひの山の前川霞そめけり

鉢福山　はちふくざん

○西山上人伝　左の遺命にまかせて西山鉢福山に廟所を立てゝ送りまゐらせけり○拾云　西山鉢福山ハ縁起に曰く雑文書に曰く所ハ立善峰寺葉室鉢伏（ブセ）又掘谷（クツキタニ）又名勝志云俗鉢伏（フセ）今属田字某跡

羽易山　はかひのやま

○万葉集巻二　長歌略
大鳥の羽かひの山に我こふる妹はいますと人のいへは
同巻一
春日なる羽買の山ゆ佐保の内へ鳴行なるは誰呼子鳥　作者未詳

○拾遺愚草
鷲の羽かひの山の山嵐のさむくしも何夜寒ものうき月

○夫木抄
雪の玉ゆらぬを佐保路なるはかひの山の松雪をぬり　権僧正公朝

拾山　たハらや末森　山城

○後撰集十六雑四　左大臣のかくせ侍りけるさうしのおくにかきつけ
侍りける
拾山みねの嵐の風をいたみふる言の葉をかきぞあつむる
○清少納言記　山ハたハらや末

泊瀬山　はつせや末　大和国
はつせの山　はつせ川　長谷山ともいふ
万葉集巻八に廿首あり今略之　又日本記卯云
雄略天皇六年春二月壬子朔乙卯天皇遊于泊
瀬小野とて御製あり
○宮内家合　又　晩立　廿三番右
初瀬山夕日ハさせと發泉や侍への里の夕立の雲
○壬二集
あかつきのえんハ初瀬山侍ちの里に樵夫ありけり
○拾玉集
はつせ山峰のさくら發泉や侍への道ハやすく夜深さよ

○夫木抄 聖 定秋なと音にきゝてかへり見しそれハつくは
しるし
足柄てハ湯之丁やハまた山の峰の霧の下ハやまとなるを
○山家集
時雨少しとてしつこゝろなきぬと勒懸の山ハくもり居れる
○月清集
雲かゝる人の言そきこえぬるにふもと勒懸の真への山高し

長谷山　はせやま　大和国

泊瀬山の同し泊瀬川をも長谷川とかけるにおなしく

○夫木抄　雑　定頼卿長谷寺にまうてゝかへりてかの山の花をつかはし　前大納言公任
けり
見捨てゝは帰る道こそやははせ山の花の盛のことゝいはれぬを

○尓字部

丹生山　にふのやま　大和　吉野郡

にふの川　日本紀に延喜式神名帳に吉野郡丹生河上
雨師神社同宇智郡丹生河神社有り

○万葉集　第十三　長歌略
斧とりてにふのひ山の木こりきていかたに作りこ

常盤山　ときはのやま　山城　葛野郡

ときはの森　常盤里　ときはの井

○大和物語

立河　ときはの山の岩ねをこそなく秋萩の思ひ都はこそれて

○拾遺集

常盤山雪ふりかくれは名を忘れたる山や咲らん

○柿本人麿集

ときは山二葉の松の年をへてくもせぬなるん時ともえ　よの

○紀貫之集巻一

う川なるは　ときはの山は時雨のはめて　かひなかりける

日

う川なるといふを　思ひて常盤なる山は秋は紅すゑなる

○深雪之集
花咲ぬときこその山の常は雲とみえしもまたおもらん　恵慶
○赤染衛門集
常磐山名のみなりけり夫露ならなみにいとまるらむも
○右京言光集
それのみにしときこその山も大空の雲にかすむとえそしらぬ
○拾遺和歌巻一
かきくらし頃　椎柴結ひみなときはその山は秋やこゆらむ
○夫木抄廿一　摂政家屏風　子日卯杖
君をのみときはの山の木積はいつはれてとれるなりの卯杖は
同
九重にさかぬいろそ我君の深きときはの山吹の花郷
○同
好忠集　つちのと

人をのこよまたもちてときはの山の谷の落葉の根にそそまかる
○夫木抄廿八　天暦十年坊城右大臣家歌合　讃人不知
常磐なる山のやま生茂せをいつもおはは見のまた見ゆる
同廿一　延喜七年正月庚申歌合
名のみなるときはの山の五葉松君か千代の卯杖なりけれ
○忠深遠集
常磐山おひそふ松をたのみてそ枝さしそへん千代のまつ
○夫木抄廿　秋二　為家
ときはなる林の蝉さすらひに秋をは知らん声そすくなき
同廿一
時雨ときはの山に住人はいつともわかぬ神のまつらん
同廿
八幡臨時の祭の使のかへさ　堀河右大臣
ときはの山の紅葉をわかせる大井川にて散紅葉はなかれ

口卅　続宣家集
うつろふ花ときをとの山の桃花といのちハ花のそ志らん
口卅二
ときは山椎の下葉のすゑかくれて見ぬ人の為のあとなき　西行

飛
鳥羽山　とばやま　大和国
鳥羽秋山ハきこえたる山城国の名所なり故に鳥羽山と
いふハすくなきの方にせるハ御事之数字名所集ニまさ
にて大和国ニ鳥羽山ありとしもへたん

○
やまとにもせんつとも白雲の鳥羽山松のまつそのまにまに
○揚祝吐猿論上　是ハ万葉集中坂上女郎の家持に贈れる歌
四首の歌乃中に
白雲の飛羽山松のまつつも我恋わたる此月ころを
とよみたり此飛羽山ハ大和にあるや此次に衣の
を打廻の里にあり我をとよみたり此十一に却名火の打廻前と
あり…南備ハ高市郡にあれハ飛羽山も同郡にあるやうなり

記ニ孝霊天皇の皇女倭飛羽矢若屋比賣とも大和を名
ニ負之乃也

○夫木抄 第二　真寂法師家集
雲羽山なる河鹿の声きけハまてまされてもなき神代

戸難瀬山　となせやま
となせの滝　戸難瀬川　となせの山岸　山城也

○夫木抄　為相
岩根ふみそそ埋もとなせ山いまきなの滝乃おくるゆるしふ

鳥部山　とりへやま　鳥戸とも　　山城

とりへ野は旧名也　鳥戸とも書り　此事委く鳥部野ニ出

○源氏物語　すま

鳥戸山もえし煙もまかふやと海士の塩やくうらみにそ行

○宝物集一　　中納言成範

鳥へ山思ひやるこそかなしけれひとりや苔の志たにくちなん

○拾玉集五　法華堂御堂の桜よめる

鳥へ山名のみのこれるけふりかなひとつにならぬ人の名きあとを

○徒然草　上巻七段

あたし野の露きゆる時なく鳥部山の烟たちさらてのみすみはつるならひならはいかにものゝあはれもなからん世は定めなきこそいみしけれ

とくさ山　木賊山　　甲斐国

○宗久旅日記

甲斐国とくさ山と云山の麓山臥の庵に一夜宿りしに

しらはかの雪も消残りけるをみて侍りしかは

○名所秋山　山城也紀伊郡

○續後拾遺　前大納言爲世
夜々川ぞ同の里の稱もしる秋きもすたる秋の山かぜ
○云事この歌秋山をよめる歌のもしあて撰集に入る
この爲世ハ後醍醐天皇の御宇の人々

○山城名勝志十六云人云城南寺東西乃東側の岩や秋山
といふ唐土の例守云々

○白氏文集　君若好登臨城南有秋山君若愛遊蕩
城東有春園

○内裏雛　人皇七十六代近衛院の御宇于城南離宮とてこの
名所の里ぞ有所云々　此邊の山城秋の山といふ今城南寺
ハ名所此邊の御宇離宮跡ハ秋の氣ハ九月朔日

○若宮白河院名所段于右ハ事にて附て塲所八幡寺なりて
紀山のくゝ川世のしるし

○平家物語名所段池の名をも見事なる世ハ秋の山の春風に白浪立ちて
折々けてらく

とませの山　泊瀬　大和也
泊瀬ハ長谷初瀬同訓なるを泊をとまりとよむより泊を
とまりとよめるを誤て何とハとませとよみて止とハ訓
しき大和国の泊せ本より海なし何ぞ泊と舟泊
とふかり疑ふ泊と枕詞を置くそのさゝれとも誤さま
久しき事なれハせんなく泊瀬をとませと訓ある有

○金槐集上　雪
夕されハ浦風寒し　行末とませの山に雪ふるらし
○新續古今集

○秋池吐懐録　泊瀬山

夕されハうき風し——

右万葉集中十よ

海士小船泊瀬の山よ降雪のけならく恋し君か声そする

是をこれ万葉の歌泊瀬を今の本にハはつせと点しけれとふるくハ誤てとませとよみけるや舟をとむる古語にハあらすと云けり故ハ泊の字をもつとハよめる也古語に無せぬ人のは字伝にとまりとのミよめるに付て誤りなる事六帖にもとませの山とよめる歌なれハふるくより誤り来りしをまさしくこゝにしてよめるし

外山　とやま　　雅言

うくそもに名前よあつまそ奥山よ対て奥山ハ深き處にて云あて外山ハちかく浅き所に云端山とも云又同し麓ふ山のをしよ云之麓外(やと)にふ俗言よ叶へりその意にて麓外を此にふと訓也し

○後拾遺集　春上　うちのおほいまうちきみの家にて人々酒たうへて歌よミ侍りけるに遠く山の桜を望むと云ことをよめる

高砂の尾上の桜咲にけり外山の霞たゝすもあらなん

大和物語

十市山　とをちのやま　大和十市郡
十市郡とをちの里
○名寄
三吉野の里　十市の山櫻夕ゐる雲と見えそうつらふ
○夫木抄　六　一字抄　題未詳　国基
奥深くさし霞ハ春の十市の山をそのもとへてけりや

○六百番歌合　夜　吹上十九番左　女房
入日さす外山の雲ハきれはてゝ嵐にまよふゆふ立の空
同　冬　落葉　廿番右　家隆
木葉ちる外山の峯の谷かけハ袖に嵐の音そしくるゝ
寄松　十番右
外山なる葉の下にハ風さえて霰ふるよに松の音哉

鳥籠山　とこのやま　近江犬上郡　犬上郡

○万葉集四

近江路のとこの山なるいさや川此のころくは恋つゝもあらん　岳本天皇御製

○清少納言記　とこの山よの名もらすな御門のよませ給ひけんいとをかし

年越山　としこえ山　今俗坂折山　土佐国

○大湊紀行　土佐家臣　広部良遊　坂折山へのぼる　坂折山ハ年越山なりとなん

といふ　祈年の社ありてとしこえ山となつけしといふ　今の

後西の時乃始四方に廣き茅原なりし　後是ならし假居と云

に士の先祖百姓ありて稲生村の古ハ南人家ひらきあて　この

住家をこの稲生ハ我居山の麓乃村にして野火あとこの

ハ一面に焼ぬへけれハ柵方に火防を切なりとて　その時家

譜更を坂折山に移せしと遺語に坂の名を豆腐をいへす

かくの坂の者ともハ譜更らしくなれハそれを移し

まる故に坂名をいひしなりん名をおもひて万葉十をも

刺焼の類に何の嘆くなるへくものハとしこえ山ともいひし

しなり　東野に吾川郡にあるハいつもこなたにあり

云見れハ吉近くて深すへきことされと希義言是
郡の吉良の城に居られしを道ハそこより落去り給はせん
りせしか吾川郡今の年越山にて殺されけりとしるされ
年代記にハとかく諸説も何れと希義初めより吉良
の城に居られしか十ましらか説も見へてあり希義の紀
ハ大系圖にハその住宅の内にて自殺とす見へたれハ吉
にもう説區になりと見ゆ希義の子ハ何も是亦
大系圖に載られハ南海の傍人の過ハ八郎と云ふ名見へ
し東鑑にのせられたる過了介良庄より出て向かれ
ゝり介良ハ吉良とも称しもし和名抄に見へたり

○沽斫遺叢九 筑紫雜志二十條中 豊山
豊後諸山、有濤齧爲岸之路、行路睹之、其高各十餘丈、山低
者不及其跡、予疑問土人云、傳稱此郡海底也、唐船來往、
今郷有船衡船内之名爲此也、復往々掘得古船材、予辯之、
此非海水也、必湖水也、特与伊豆國箱根湖相類焉、東北隄
障、或遭震折、或外海冰撃之、或内湖水穿之日、脉月剤致
若斯耳、若夫海水則其高何到茲哉、昔依山成人跡、故訓日
本日山跡、此郡民亦然耶

廬山　ちよのやま　名所なるべし

○拾玉集日吉百首法文

あさましや数きゝなき　ちよの山路いくへこえきし身をしらず

千世経山　ちとせのやま　近江国　右字 丹波

○
としまち千年の山ハ幾総も君か御代なそへ祈りつるかな

○拾地吐懐編上　此哥天禄元年大嘗会近江国の哥之
上ちいふらめし

千年山　ちとせのやま　ちとせやま　丹波　桑田郡　大葉集

○堀河院御百首　師時
嶺つゝき松の木しけく見ゆるなる千年の山路成らん

○夫木抄　宗尊親王
ちとせ山岩や昔のさゝれ石いそ千とせき苔のいろは

○續後拾遺集　賀　祐子内親王家紀伊まちへ知○夫木抄
まさこより岩となるらむ千年山こゝや君か代のためしなるらん

○万代集　頼氏　○夫木抄
動きなき千年の山のうつきしハ久しき御世の志るしなりけり

茶臼山　ちやうすやま　旧名 荒陵（あらはか）　今改 勝山（かつ山）

○蘆分舟 巻一 大坂部 仁徳天皇御治世八十七年春正月御年百
十齢にて崩御しまふ御廟の 今ハ堺方町 本聖大明神と 其年の冬十月陵
を此所に築んとありしがいかなる事にや堺なる辰巳のかたし
はなりて百舌鳥耳原といふ所に葬りまゐらせしとぞ それより此
所を荒陵といひけるとぞ 然るをいつの頃より山の如くに茶
臼なりし似たれバとてかく世俗にいひ伝へ又元和元年中
御出馬の御時恭く　征夷大将軍源朝臣此山に御本
陣をすゑさせられ御武運益々御凱陣の吉祥山と崇
命ありて于今此名を呼れけるとぞ其比何人やらん
御所様ハ源氏乃茶臼山引まそされバ武士ハ散し

雄徳山　をとこやま　山城国

男山と云ハ此山ハ鳩峯ともいひて石清水八幡宮の
おはします山なり　名跡石清水の流も出来

○壬二集　石清水若宮歌合

数ありて我身ハ老ぬ男山さかゆく宮も哀かけなん

○新六帖　衣笠内大臣

男山さかのぼる人ハ宮鳩の杖をもかゝりゆかん

小泊瀬山　をはつせやま　大和国
泊瀬ノ前也
○後鳥羽院御集
夕くれて一聲なくなる郭公をはつせ山乃夜をこめて

をばすて山　本名　冠山　信濃国更級郡
このをはすつまり定りぬらし このころちかき和名抄に祖母 爾雅
云父之妣爲王母 九族圖云祖母 於波 孫炎曰人之祖若天王故王父
王母也となれは祖母をそはすと云て奥の木をははかハ大母おほはの意をも云
またく伯母叔母ともに訓をはといひしも見ハ小母の意を端のと
も有り 和名抄云 伯母之弟曰季母 和名於波 九族圖云伯母 和名乎波 今按父
之姉也 叔母九族圖云叔母 和上同上 父之姉妹爲姑 爾雅云 阿叔母 和上同上 と
述父の女兄弟をとも又をゝはといふハ母とおもひて小母と云の意と
見ハ父方のをはと母方のハ文字かはれり同しく 和名抄云 姨 唐
韻 壽夷 母之姉妹也 となれは見えるを訓ハ同しく 又方母
方のつのちしさて此字ハ又別義なるに 和名抄の次に又也して
姨 爾雅云 妻之姉妹同出爲姨 夷反 与一云 伊毛之 女以曰 字云女 とあるハ妻之
の女兄弟なれは 俗云小姑 女のことし一字古義あらは 女以ハ見え也

和名抄ニ爾雅云夫之姉為女公 和名古之宇止女 兄ハ小姑の意をもて又
女妹爾雅云夫之女弟為女妹 和名日女公日 又姉妹也にあるを兄またひ同
訓ある意也 是をこころえて此山いつれなりといふ志りかたし 但
大和物語を考れハ信濃国更級といふ所ニ男住けるが若き時親ハ
死にけれハをばなん親のごとくにあくまいひそひてありけると見えけれハ
おほをば祖母をも 親ハ死けれとも 此老女の養育をうけて 又ハ父母の姉
兄弟をも 伯叔母をも をはといへハ いつれ也さだかに兄弟ハあらで
祖母をも伯叔母をもをばといへれど大和物語の詞にて此書の如くをばといひて
と多くてこの志うとめの意かとも考らる我思ふにハつくとる
と云べハ姑ハ夫之母曰姑 和名之宇止女 又姨 和名抄唐韻云妻母之姉妹と有
にあつて夫の母の兄弟なれハ我母の兄弟をもあたりて姨と
云をとすくなるべし

姨捨山 并二 俊頼口伝集

○大和物語

○藪木集曰　あきらしりとも越えれはなる名をさ唐　上
なびなりにかるときこゆる人をつかりしるる
数ありかなしきをハまての山あれハもさらしなと特殺詠ろう

○續古今集　藤
こよひ秋をまちての山の夢をて月待るらそ誰かあくき　前大僧正覚忠
○今集ニ此二首ハすへく場をも申ねし

○弁内侍集
今よりハ秋をハまての山桜花をも月をも末のころ　源有親朝臣

○拾遺愚草
あくさまた　いつまでの山も位別し　宿をハまての月の旅　旅ハ
秋をいくハ月のひかりを吹風の雲をハまての夕ぐれの山
此歌ニ家て名をいひかけ是ハ場の名を申ら歟

○清少納言記　山ハさらしな山　をきまて山

○夫木抄曰　能因
見ぶるとあくさあかれハ桜花をもまちて山の月をみするかも

○弁内侍集　後京極摂政詩歌合　花流山寺
今よりハ秋をハまての山桜花と月との名残のころ

○拾遺愚草
あくさまた　いつまでの山も位別し　宿をハまての月の旅　○ハ
日秋をいくハ月のひかりを吹風の雲をハまての夕ぐれの山　○夫木抄　京極后

○赤染衛門集曰　女院大きさきの宮姫宮の御所へ　姫の少納
言の内侍に給はりとやてのりこさやりし
まことにもまちてみの月ハみまさらし家のいのちなり
○此歌後拾遺集十八雑第　太郎朝臣　少納言女の

姪ある女よまいはとうつ侍りけるを出てつかはし
けると　未保忠の
まとゐせし姨捨山の月ハ見るもゆかし（不去）なき見ぬ涙を
○めにみそうしくしと
○小野宮集
はやしくもなくさめかねしわかをを捨山の月もみえなくに
○凡河内躬恒集
見つゝ見るなくさめかねつ更級の姨捨山にてりし月哉
家集には見えす萬葉の家にそのさ段おほつかなしの
再考

をちかたのやま　遠方山　名所にあらす
○曽丹家集
さき葉もをえぬるんやそまたいとこハおほつかなき遠方のやま
○夫木抄廿一　蓬莱

男山　夫木抄第八　作

小野山　をのおやま　をのやま　山城　近江
名所有

小野　をの里　小野川原

○拾種集　曽根社信

大原や炭やきたつる人をして小野の山邊にすまゝせつる

○源氏物語　夕霧

秋の夕ゝ袖をぬらす所小野山ハ松かぜ滲や吉かれの露

○夫木抄　廿六　懐中抄　○名寄　元輔

いかにしていふたよならん小野山の上より落るおとなしの滝

○日廿一　続宣家集

山城の小野の山への宮木こる斧の音にあふなる

○夜京實方集

蔦の手子袖をぬらしけり小野山の山の上よりこそ出るをかな

小野山

○夫木抄　近江也

東の方へまかりけるに近江の小野と云所にて

雅経

わすれつゝ見もやかへるとおもひつゝ別路旅寝の小野の山ふみ

小爲手山　をすて山　紀伊

○万葉集七

安太部去小爲手の山乃柀の葉も久しく見ね八苔生けり

（アタヘユクヲステ）

○拾遺愚草

柀の葉のふかきをすての山にしも生る苔のたまきはやとふらん

○名寄

誰かまたかすみをすての山あらん柀の葉分る月のこゑ八

○壬二集

夕露に我袖かけて番小舟をすての山乃柀の末しらせ

○新六帖

見ぬ冬に成ぬとみるをすゑ山梢のふる木は昔深き遂て

○玉吟抄　鎌倉右大臣

風さむくをとすゑの山の夕ぐれ昔おもひしも梢の木の間

同

白玉の緒すゑの山の秋の露つらぬく草も金枝なるん

小倉山　大和十市郡

此山歌に多くよめるは山城国葛野郡なるをしるされしかんの

大和にも同名なれは今の平出撰の郡にあらされしかんの

舒明天皇の御製歌を此に出されは昔の事に云せし

竹取物語の歌は今の山城にはあらて大和と定むへき

文字は難なれとも小くらの里とある歌万葉集に古き歌は

因山にまよ合せれは差も文大和を知へし　同事先

○続古今集

夕されハ小倉の山になく鹿のこよひハなかすいねにけらし

○今案に此歌ハ日本書紀

○竹取物語

おく露の光をたにも やとさまし をくらの山にて なにもとめけん　かくや姫

○名所補翼抄 卷之一 此言ふの次に云 彼物語にかく夜姫を乞ひ給ふ
なる人の中に石作のみこにハ天竺に在仏の石の鉢を取来
てえさせ給へとのたまふに大和国十市郡にある山寺の
賓頭盧（ひんすゝる）の前なる鉢を取て錦の袋に入花の枝につけて
かくや姫に備へけれハ何の益もなき事の有ける時かく
や姫の歌なり かれハ大和国十市郡に小倉山在て そこに
寺も有けるなるへし

小倉山　をくらやま　山城 葛野郡 大和

○六帖
をくら山峯たちならしなく鹿ハ何をそれともわかぬなるらん
おほつかな小倉の山にやとる鹿の声たかくとも聞わたるへき
小倉山とまの松のいくそたひされ鹿の音はかり年経ぬらん

○赤染集
忘られん身をハ思ひて小倉山こゝひのそらやなひ出ぬらん
本詞書ニよまんとおもひこもりゐたりける根又
何のうへやいみしき秋のさかりなとておもひ
遅
君をこそすゑハ忘れめ小倉山月まちて月はまちつらめ

○夫木
小倉山ふもとの雲ハ嵐山の かすみの川のきりなりけり　花山院御製
○落葉之集
春霞たつやをくらの小倉山 おもひのうちは雪と見えぬる　○夫木抄
○　高遠集
小倉山下ゆく水も わきとめて すみよ川の秋の夜の月　○夫木十三
○與風集
をくら山峯のもみちは散りぬとも見てこそ見ゆる志賀の浦波
○源順集
小倉山 おほつかなくも何ゆゑに鳴鹿の声かきまさるらん
○曾丹集
人またぬあらさりき絶てし小倉の山の陰ハいかにそ
いまはよし小倉の山にすまひして 経きさむの秋をもみ送

○夫木抄　延喜十三年 亭子合
うつろひて花なきされハ小倉山いとゝ霞の立かへりけむ　壬生忠岑
口廿　題不知　兼明親王
小倉山かくれなき夜の月影に ひらの湊をこひてこそなれ
○元河内躬恒集
ふみわけハ小倉の山乃紅葉をと庭さへてりて見へそ嫁らん
○小野小町集
小倉山さえしきりの声も我身の ハいさのさへかなし
○坂上是則集
梅の香ハ手種のうちさやさきそ浪の小倉の山とふらん
○貫之集
出見寄ぬ月入花灘暁
入ぬれハ小倉の山のをちにこそ月なき花のせともぬらん　経信
○夫木抄

夕されハ宇治小倉の時雨ハ何処の山も夢もしのひそ

○夫木抄廿一　　為家

いさやて朝日の嶽よ君かへん小倉の山ハ暮れぬとも

小比叡山　　をひえの山

大比叡山を比えの山といふハ大宋貿小吉藤と云ひし人　ひ字謂比叡山条るを

山のうちその峰の大峰なりしを

○菅丹集

大ひえやを比の山も頼られハ春月も入てちる峰の邑に

鷲山　　わしのやま　　名所和抄

佛のいましん霊鷲山をいふ

○夫木抄巳　　花月百首の内　　後京極摂政

鷲の山御法のはなにちりし花を春の峯の嵐にそみる

○加字部

葛城山　かつらきやま　　大和国

かつらきの神　一言主神也

○夫木抄廿二

かつらきや山の高ねに住人は谷のそこよる雲路見るらん

○万葉集十一

青柳のかつらき山に立雲の立ても居ても妹をしそ思ふ

口訣ニ

春霞のかつらき山にたなひける白雲らくる　丹比笠麻呂

○日本紀竟宴歌　　大納言清陰

よきことを万代までにかつらきや葛城山のさかきのみかな

○万代集

かつらきの岩戸も出る春の日ハあまの浜辺の霞とくらん

○蜻蛉日記　賀茂にて

さることハかつらき山になれさんこそ一言やかきりなるらん

臨時の祭ニハ橋のわたしもなりんむしあるらん

かつらきや神代のしるしふかゝらハこゝに一言きけるらん

笠置山　　かさきのやま　　山城国

笠置山　家林於奈云

かさ八郎の窟　　笠置寺

延喜式ニ八廉跨とあり

○夫木抄　廿　　建仁元年五十首　古寺花　　定家

わすれなよかさきの山の桜花おもふかけての袖おもはれ

○長秋詠藻

雲の上に立のほるへき月かさきの山も雲にかくるゝ

○壬二集

住人の流の家もいかにしてかさきの山の流あきらけし

○太平記ニ主上笠置を御没落の事　枝書言笑和国

多賀の郡有王山の共まてに落させ給ひて女房も

李房も右近中将の官をとゞめられハ足かたくもつられて今ハいる
事のまおふり遁れぬへき御勅もさりけれハせんかたなくて幽谷の岩を
枕とし寝殿ハ方々まつとまる時の暮の外なる杉をたのむ杉の
風我雨のふるかとおとろかされて木の葉の音よりもたよりなく下露の
まへしとも御袖ぬらしける我々上わらんせられて
けふしてかくる吉野の山をハいくよとてか天下なくハかくはらるなし
花房にたまにひ残ありさくへし
いつません吉野の山をみて立よれハ移袖ぬれし松の下露

加奈井山　かなゐやま　丹波

○藻塩草
いのちハかなゐの山のまたいかに千年の聲そ久しかる

神山　かみやま　山城
賀茂山をいふ　但式に葵根をさしはさむ

○狭衣物語
神山の椎柴にくれしるしの人ならぬ中ふをきかたる賀茂の神のみこゝろ

○六帖
かみ山のあふひを卯の花の時にやしくそぬきかへて取く

○拾遺集
神山のりしきのくはてけふあふひかけみのさくらへきかし
式神山葵根をさせり
葵根社務
○夫木抄
○夫木抄 廿
神山のふもとの滝は涼しさに三つの川の底もさまらす　高遠

神山のたえ〳〵の紅葉いちしるく我こふる事を残てしほる〳〵

同　袖中抄　古今六　和歌童蒙抄

おのか君もかみ山のこのてかしはを手にとりてとる

同　莬玖波

神山のまさきのかつら長くなりて冬やひらけての

此歌は神祭の日人々ふきてかへる葵まさきかつらを

やめられはあふきえて

神山

○金槐集十二恋

神山の山下とよみ行水のいつもたえせぬ思ひしもせし

香具山　かくやま　大和国十市郡

天香具山同所也　かくやまともかぐともかぐやまといふ也　今世には

清てかく山といふ昔は涌とことに天香具山萬葉集に字あり　異也

○名寄

旅人の袖のにほひもかく山はいはゆる書写不詳そめけん

香久山　かくやま　名香山　天香久山のかよひもあり　あき

香具山　かごやま　かくとも　かごともいへり　大和國十市郡

天香具山日本紀

○万葉集

かご山の嶺の松もとけなくに吉野のみ山ハ雪降らし

○夫木抄廿三

いる日の影のときはかご山の嶺乃松もやさゆらん　藤原伊嗣

神垣山　かみがきやま　大和國

○夫木抄八云　寛治二年百首　少将公　後九条内大臣

ちはやふる神垣山をここえてそ叶ふる方をやまもるまぬ

日本　七社百首　為家

青旦ある神かき山のゆふしめ縄絶すもあまのいはねを

神岳山　かみをかやま　大和國

神岳峯

○万葉集九

此の山に紅葉つりし神岳の山のもみぢハけふかちるらん

○夫木抄

神岳の峯のあらしや拂ふらん此の山のもとに黄葉ちりくる

◎万葉集　長歌

神岳の山のもみぢをけふもかもとひたまはまし明日もかも

めしたまはまし

同三　登神岳山部宿祢赤人作歌

三諸乃神名備山尓五百枝刺繁生者

反歌云

明日香川かはよとさらす立霧の思ひすくへき恋ならなくに

○夫木抄　花の御哥乃中　中務卿親王

見はいせはしらぬかけて咲なれの神並山のさくら振袖

康背山　かせやま　又　かせのやま　山城

○万葉集六　長歌　作者未詳

山しろのかせ山のまにたかしきたてゝ　云々

こゝろすらかせ山乃やまに咲花乃色めつらしく　云々

をとめらかつゝをかくちふのかせの山時のゆけれハ都となりぬ

かせの山木立をしけミ朝さらすきなきとよもす鴬の声

○清少納言記　山ハ　かせやま

枯山　かるやま

かれ山といふに同し　かれて山をいふ土をも納れは良とあれ

はかくいふ也

○古事記上　速須佐之男命不治所命之国而八拳須至于心前啼伊佐知伎也其泣状者青山如枯山泣枯河海者悉泣乾

竈山　筑前國

かまと山

○源重之集

春はもえ秋はこかるゝ竈門山かまと山にありなれぬや紅葉なるらん

はしめてまうけける時にかまと山のもとに宿りて

○拾遺集

てもくみけるにたつきて侍りけれは木をきりてまかせて侍りける

春はもえ秋はこかるゝかまと山霞も霧もけふりとそみる　もとすけ

○赤染衛集　前新院の法華八講その秋筑紫

へくたりし御乳母のもとには忘れしかしとおもひ

てその人を知る人にやりし

日数へたる御とし月かまと山も雲とみるらん

○六帖

都より君にいつそかまと山にて絶せぬ恋もするかな

世の中はなけきそくもかまと山 もれぬおもひをあかす袖かな

○夫木集

かまと山雪はれまさる峰志けみひのけを近くいてゝさかまし

為信法師

ちりかひはきえこそれても柳さきはかまと山なるひ桜の花

大江匡房

○名寄

かまと山ほしく波とこめて かすつまる岸の白雪あけてこそこめ

賀茂神山　かものかみやま　山城

賀茂神山とのことよみ侍るも賀茂の神山とのことにて御方は榊根
山を染して、みかたいつれの方にもあるへし、みをまもるへし
杉又三宝の剣奉る

○挟衣物語

神山の椎柴かくれ忍ふとも　たえ中をきりくる賀茂のみつかき

かなやま　鉄山　金山

金銀銅鉄ともにいふ　贛州府志ニ鐵山在縣
西七十里宋有鐵場故名ともいへり

○古事記上因生此子美蕃登見炙而病臥在多具理迩（此四字以音）生
神名金山毘古神（訓金云迦那）次金山毘賣神

銅山

○文選　蕪城賦　鮑明遠　かなやま

孳貨鹽田鏟利銅山才力雄富士馬精妍

○史記

吳有豫章郡銅山吳王濞盜鑄錢煮海水爲鹽

賀茂山　かもやま　山城国愛宕郡

賀茂川　賀茂社

○夫木抄廿

かも山の岩のこゝろしむすはすはこゝろもすゝしまつる榊　賀茂重保

同卅六

かも山の高根にかゝる白雲やふけしあたりの夏の通路　雅経

同

かも山のみつかれとちらき今こそは神のみやつこ

○松葉集

かものやしろの人をこふ垣の久しき世まて祈られかへ

月清集

かも山のみねとのあその藤縁心の花も神さひにけし

鵲山　詞林採葉云

桂山　かつらのやま　山城國葛野郡

かつら　桂川　かつらの里　かつら女

○夫木抄廿六　○七夢柿廿　新後百首　從二位頼家

こゝろれ川時ハ日たゝりゝかもゝ桂乃山ハ夢ならん

○補古國家に

位青まうつらの山ま合せし和何考へし

片山　かたやま

谷あまゐうさうこ　片山ハ頓丘と云なるへし片山ハ山のめくりちたらうその上ハ平地ニつゞきたるをいふなるへし片岩ものハ同意也片岩山ハ谷あなれとさそ地理ハさなからの所ゟやまん

○六百番歌合　春雉十番右　家房

細かの山雉子なけまする秋の原ま霧ものまれり

同　晩立廿四番右　信定

おきもやと人里遠き片山ま夕立まよへり枕のもとうき

○かめのを山　亀尾　亀緒

○菟裘緘　亀緒便亀山也
按如亀尾也

○亀緒　菟裘賦　亀緒便亀山也
按如亀尾曰　吾将入亀緒之裘限

緒尾ニ通ふ其の字はつゝくハをと云へし

○壬生忠見集

ひくく祝さ之度ゝ子の日代万代の松ハ亀の尾乃山

○夫木抄

君か代ハ亀の尾山に住鶴の毛衣さへ千代をかさねん

亀山　夫木抄第九
さきくさ

片岳山　夫木抄第云
古子詠

亀山　　　　　　　　山城

○亀の尾の山の岩根をとめて落る滝の白玉千代の数かも

○擲地吐懐篇上　右亀山を亀緒山とも云ふよし古今によめる詞書にも載られハ初にそのよし注すへきなり

本朝文粋　史一兜裏賦　前中書王自注云亀緒依亀山之形如亀尾之讃之故云亀緒を亀尾のことくよめるハ緒ハ和訓上声尾ハ去声なれと去声とよめるなり

○大中臣能宣集

亀山の岩ねの上の松の葉ハかはらて秋をそかさぬへらなる

○壬生忠見集

引つれてけふそきき子日する千代の松引亀の尾の山

引人ハ千世をとるとも亀山のこの齢のおもなかるらむ

○平兼盛集

亀山の子日の小松引つゝも尽ぬことしといのりけるかな

○六帖三

大井川ゐせきに住む亀山の命のかきりいはひみてしか

○夫木抄廿　万代集　○為家　大江千里

亀山のうへの若草たれかおし大井のさとは畑に成にけり

日　瑾信集

亀山にとら抄筆あとにはしても君を 祈申つる哉

○波のうへにうかべる雑さ亀山の深きをたとへつくるへしや八

此事ハ尤ありしをかりしく何ひてかくなとしいまて

又の日つかはしける

○夫木

もとも筆の苔もかはしまし亀山のこふを尽して なりもこそはれ

和泉式部

亀山の岩のおくにすむ亀ハ君か千代へんためしなるらん

君か代ハ亀の尾山の岩露の气衣さへや千代をかさねん

亀上山

蓬莱嶋の異名 かめのうへ乃やま もろこし海の下に有し

○拾玉集一日吉 百首恋

我恋ハ亀のうへなる山なれや苔をハつけともみえずとし

○夫木抄

いくつとの底に根さしある浮嶋ハ亀の背中につめるなりける

神南備山　かみなひやま　丹波国

天和ゝ日名之

○懐中抄　讀人不知

かみなひの山のしくれにまよひて　時鳥なくなり　杜雲の里

神道山　かみちやま　伊勢国

○弘安ゝ來詣記　隆西仁

かみち山さも面白き榊かれ天の岩戸もあけや明らん

○拾玉集

神路山万枝の松の常磐なれとさへ尽ぬ君をまもりの末

あはれとて君をまもる神路山万枝の松の千代乃何りまて

神名備山　かミなびやま　大和国 丹波ニ名有

神なびの森　神名備川

○千五百番集

神なびの山乃紅葉我なれや　あさゆふしぐれの　そめつれバ

○夫木抄 十二　指基家集　神なび山のふもとまで

我なりぬ神なび山のすゝきまで　つゆぞなびく 答もねこえ 鳴かれ

帰山　かへるのやま　廉蒜山　越前　敦賀郡

雲回る峰の事を思ひてよめる哥なん明の一統志廻雁峰

ハ在衡州雁至此不過遇春而廻と見ゆるをもとハ廉蒜山ありて

を今ハかへる山といふ

○李白詩　送君不盡意　書及回雁峰

○許渾詩　懐君在書信　莫過雁回峯

○挾衣物語

恋しきもつらきもおなし　わかれまて　きミにしも猶かへる山かれ

○凡河内躬恒集

君のみも旅路の　都ハまつかへるの山に　かへりこそ

○壬生忠見集

旅人をうらみての花やたちとめし嶋の山吹まさ散りて

○中務集

梅の花色ハ雪にかへてかへる山まで君はとまらん

○清少納言記　山ハかへる山

○後鳥羽院御集

世をわたる山思ひつる我の越海を越えゆかへる春の鳥

春日山　　　　　　　　　　大和

かすかの里

かすか野　春日社　かすか川　春日原　春日里

○新古和歌

常の初風に遠く春日山霞のころもはきいつらん

春日山をちもおなしかすかの山ハ花ハのこりて苦ぬと雲

○夫木和歌

延喜十一年三月　亭子院歌合讀人不知

若葉さす春日の山乃山桜ひらきてきぬる雲ととみえて

口伝

松契多春　　　経信

春日山高ねに立る松の緑の色ハかはらしハしるらん

鎌倉山　かまくらやま　未勘

かまくらの里

○万葉集十四

薪こる鎌倉山乃こたる木をまつとなかいはゝ恋つゝやあらん

○堀河院勅定百首

かまくらやみこしかたけに雪消てみなの世川に水まさるなり　顕仲

我ひとり鎌倉山をこえゆけは星月夜こそうれしかりけれ　常陸

○藤原実方集

かきこもりあるとおとせぬ人しきみ　ゝあすけ

鎌くら山に夜まよふる　実方

香澄山　かすみのやま　常陸國行方郡
霞里　霞浦里　霞山
○和名抄常陸國行方(ナメカタ)郡　香澄(スミ)郷
○夫木抄ニ
きのふまてさえし筆をとりのへて明る霞の山のはのきき

笠取山　かさとりやま　山城國宇治郡
○清少納言記　山ハかさとりやま
○六帖
かきくもる雨ふることもまゝ志らぬ笠とり山またとハ八重ぞ　貫之
雨ハふる庵ハもらぬ山科の笠とり山をいかてなるらん
○堀河院初度百首　大江匡房
打わたり笠とり山の志つくにて袂そぬるゝ人なとかめそ
○夫木抄八　郭公　家集　基俊
ほとゝきす笠とり山の時雨こそはいかて雨やとりせよ
○拾玉集

雨そゝく志つしき雲ゝ晴ハ霧笠取山の清瀧の音

○山家集

まさきわる飛騨の工や出ぬらん村雨過る笠取の山

○六百番歌合 秋 秋雨 一番右

雨それと笠とり山の廣の音ハなかくよその袖ぬらしけり

鏡山 かゞみやま 近江國野洲（ヤス）郡

かゞみの宿

山城 本茶日名山

○清原元輔集 一条大納言家ニ

卯花のちりしく庭さかりぬれハ鏡の山ハくもりさりけり

雪ふるに鏡の山ハくもるとも和歌のうらにて帰るへきかな

○大伴家持集

よきまちたる鏡の山の春ちかき うつる時にそ花ハ見えける

今けふそ鏡の山をこえゆけハ見れてあかぬ妹か姿あり

今案するに此歌ハ鏡山と読合たれハ是ハ山城か

○深吟集

名にしおへハ何かくさるゝ鏡山まへにも夜の影ハ見えつゝ

○平兼盛集

立よりもみえしやらん鏡山けふまてきみの何かハ

かゝみ山やまてきつゝはよふみる世の業をしも歌に詠かな

○夫木抄 九　天延元年内裏御屏風　元輔

冬寒き宮の秋のむすまハ鏡の山そいとさやけき

同 十五

春つする紅葉の色や昔より何つき鏡の山とみるらん　源治公

○堀河院御百首　国信

おしなへて青葉の頃ハ鏡の山さへくもるらん　師時

人影もさやかに見ゆる鏡の山はてにけん

○夫木抄 廿　大嘗会御屏風　帥中納言匡房

まそみ清く見えけんと鏡山まつの明の月もくもらし

洛所遺藁 巻一 東山道紀行卌四首中　鏡山

何年号鏡山照破幾人間再過不須以吟鬢今已斑

○よ字部

吉野山　よしのやま　大和

吉野　野語ヨ来くおりも　川　跡

○古事記下　曳民斯努能々

○日本記廿七　天智記　曳民之努能々

○万葉集八　廿三首

○菅方

○赤染衛門集　　大江為基

○よしの山月の影こそかへるさハなかく出るところなるらん

返し
みよしのゝあらしの月ハくもらめや吉野の山に入ぬとは

同
春日野ゝをかの若菜を摘とてもよしのゝ山に出ぬるかな

みよしのゝ山の初雪ふりつらん春日の里もさえまさりけり（さえて見え）

○新撰和歌集　不知

若菜つむ春日の野辺ハ何なれや吉野の山ハまた雪のふる

まて見む吉野の山やいかならん去年の秋の雲たなひく

○六帖

三吉野の山の霞を今朝見れはいつしか春の来にける

吉野山

○源経政集上　春部　立春　俊成卿家十首会のうち

今日よりは吉野の山の岩尾には昔の雪を春と志るらん

○六帖

よしの山岸の石なしつ河ハよしのゝ御事と思ひたまし

○凡河内躬恒集

三吉野の山乃名ハたちそめ春といふハ雪のふらぬ日ハなし

○紀貫之集

君まさハ寒さもしらし三吉野の吉野の山に雪ハふるとも

○源氏物語　薄雲

雪ふかき吉野の山をたつぬとも心のかよふ跡絶めやも

○紀貫之集

三吉野のよし野ゝ山ハ百年の雪のミつもるところなりけり

○大伴家持集

我やとの花ハちりつゝ三吉野の山のさくらハまたちらなくに

○斎宮女御集

見すれハ春のゝきえし雪もとゝつきて吉野の山をすとやも

○源信明集

千年の雪てハふらぬ吉野山いく万代のつもりなるらん

○清原元輔集

風ふかぬ吉野の山の桜花咲ぬる春のすきぬなるらん

○藤原元真集

咲さくら先よ吉野の山桜まちあかれぬハよそにても見ん

○壬生忠見集

吉野山みねの雪ハ消けれとも衣かしまきのかつむ山

家ゝ所吉野の山を尋れハ葉廉ハ雲のとまりなりけり

浅みとり春ハきぬとも三吉野ゝ山の霞の空をうらなん

○中務集

跡の糸ハ三すちありつらん吉野山雪の高さハ去年之て

つゝ絶て入りし日より吉野山跡の高さも人のきくこそ

吉野山跡の高さハありつれと帰りしより今ハ忘れて

○夫木抄

みよしのゝ雪ハ消ゆとも吉野山跡の高さに春を去らん　加賀左衛門

○六

吉野山やまをなつかしみその中も中に　大納言経信

○廿二

いくかへり山も霞て年ふれと春よ来るのこと(?)まてや　侍従姫　雲を分(?)

○名寄
よしの山桜のひまに花の松雪まにみゆる草かくれなる
○宗尊家歌合冬　雪　女房
風さむミなふきこえぬのあたりハ吉野の山の雪けなりけり
同名寄　雪松　十首歌　顕昭
よしの山峯のかけちに雲さえて松月をや見しつ女かきねハ

与謝大山
与謝　浦　海　濱　よさのおもひを　丹後
○夫木秋廿　和泉式部
まつ人ハ行とまりつゝあちきなく年のミこゆるよさの大山
同
ま木のたつゝ橋立や松原こしの与さのおもひや海

吉田山

○雅筵酔狂集 冬

吉田山おろしてさえ九ハ思合も白川とふる雪の明ぼの

なかおの峯　　　高千穂山　　　日向国

古事記上故日子穂々手見命者坐高千穂宮伍佰捌拾歳

御陵者即在其高千穂山之西也

手向山　　たむけやま　　大和　添上郡　近江

○萬葉集十二
すそのゝにきえてかへりて　ゆふたゝみ手向の山をけふこえん

○猿投吐懐編上　此歌ハもと万葉第十二にありて猿句也
たゝなり　ゆふたゝみ手向の山ハ人見て第六にゆふたゝみ
手向の山をけふこえてとあるハ近江にて旅をしく
此ハ大和のことも大和の手向山にハ万葉にしき〔や〕
紀にも近江とも　れる也とハ手向の山の私にえらん
大和之集に仮名(?)人の紀ハ井にぬきやとてとある
ハたゝ山のふるめし

ゆふたゝみ手向の山の桜花ぬさにもおらん風を吹
此歌ハゆふたゝみ手向の山とハ万葉よりつけきたるとされ
ハ手向とつけん為にかけられハいつれも通ふへしぬさも所
詠人不知ハ古今集より大和のくにまれハ先手入給
ハその山にまれ詠り　新字名所集をさすそれのふく

○清水寺記山ハたむけ山

○万葉集三
佐保過て寧楽の手向におくぬさハ妹をめかれすあひみしめとそ
此歌を和歌童蒙抄に奈良の手向を妹か手向ハ見え
まゐなりけり了声して其後聖武天皇御製
とせられたるハ誤なり

○逢坂名所集　　　　　　　　　　順徳院

白妙にゆふかけてけりゆふさゝに手向の山の花のちるころ

○名所補翼大抄之　契沖　此所の歌ともに奈良の手向山とす
ゆれハ此御製も同所をよませ給ひしなるへし　但しゆるハ
みを手向山とハ　万葉第六同第十三　近江の手向山とハ
けてよめり　歌もハ本歌に叶ハれて　近江の国所なれハ
しとの挽歌とも亦て出るもの多きなり

今案に後明の家にもある逢坂之百首名所和歌
ハ古筆まて有る証人にも此歌を考るせらるの和歌に
ハゆかりこそゆふかけしとあてなきを見て此まゝ云ハ
も近江に出る考へ分らし此序万葉集をとられさ
ゆゑハゆかりの事まて云ハ語まていふなるをけりあるへし

まくて逢坂山より手向出る事ハさらなりまて　此所を即
ゆうちつけて手向山とも云へるにこそ　万葉集に見えし近江海
晩頃還来歌
ゆふたゝみ手向の山の岩ねふみてこれ越えていつれの子等
と詠り是ハ世の手向の歌より近江へかゑるの
川と有て伺ふの事を云より山科の
を過て逢坂山を越るより　万葉集にてよみたさて
手向ハ万葉集に斎祀とも祈とも出て何もけと訓
るハ今手向の山と申すを即ち僧と云而て寿
神に出る事を表之義にて手向と祈とも出れし
あるへし　契沖の考にも山の峠の事とせしたむけ
ところ通説もたうけと云あるへし　東雅に古事記
をとりて云ハ何つもかハ仮名も　たゝへ又其之お
家集に拝のもの御を祈ると云ふ事も此手向

委しくハ神名考ニ委記せ於し略ス

手向山　たむけやま　近江

○万葉集十二

よそのミ君をあひみてゆふたゝミ手向の山をあすか越なん

○夫木抄

鳥居川赤坂山乃境なる手向の神ミ我ぬいの哉

紀伊国伊都郡

高野山　たかのやま

寺　参　橋

○山家集

高野山暁をまつ峯ふかみ見るハきしき嶺のよ月

○拾玉集

ありかたき高野の山の岩かけに大師ハいまにおはしますなる

おもひやる高野の山のふかき夜の月をもまたて何とみるらん

○名所補翫抄ニ　松葉集ニ川とあり　露とあらし今思ふ神の前とかゝり　拾玉ハ何とその誤りなるへし

○紀伊国地名

高野山

燈籠堂　御供所　求聞持堂　御廟橋　玉川

奥院　大塔　小塔　金堂　大師堂　鎮守社

紀乃見峠　きのミたうけ　東家　橋本宿　紀の河

清水　かふろ井　紙屋の里　禿宿

○宗祇諸国物語ニ　紀州高野山ハ弘法の内院之寿大師入定の廟有而ニ立燈籠堂御供所求聞持の外堂南ニ高く華也松杉の老木梢雲におひ志けれ蒼天ニ梢をまじへ白雲にむすひ入る日影の臍さしておそろしくその暁をたとへる御廟の橋ハ二百ハかりと見えて細川

すこと清く流るゝを　夏草深き者ハ　打返して　猶まされ
まれなる如きものにあらハ十町ハかり上玉川の水を分ちかけ
分り細流を成て毎ことに大師の御跡よ
忘れてハ汲やしつらん旅人の高野の奥の玉川の水
この高野の内より大塔まで一里余の古木皆高き人の
おもふことも木石はきさらに出塊せる名のミ盛なりと云教
を志したる大塔小塔金堂大師堂鐘楼の社無量
信心起して扨こそ菩提の種なりしめ奥の院の谷々の落
き処々居を門として語るとも尽すへからす南紀ハ生まれハ
善からし時近く出会ても発心の因となりしハ我なかる嬉
しき宿世をそ思ふ其の坂不動の前にて久しく立て候
ふ人来りて修行の志ありて何れハ御暁中より忘て請負教
出て何れ生まれの大坂へ下りて書写の居所を知り信者

の浦の眺望こそかしこ何かれハ何となく此月ハ三日市と云よ
来て泊りぬ紀の兄峠よりの行く東家より夕九ハ橋本の宿
紀の川渡りて何心敬法師言ふをさして
我上ハ白雲高き高野山積りけれ花のきさの川
といひ捨し吉野川の末を離て清水が丹生紙やの里
かゝる宿をかきて行ハ高かれと明日空山と志てとあり
ぬ去年の玉の法こゝ以て吾京大山の案内を問得て白
どより十八町にて四十岩ゐてその末四十八丁の杖とまたれ
ハ不動院の不動石佛にて大師の作と其の十町斗行て
右は女人堂何れも德内院の不動大師の作そ
また此不御堂より男へ一里て入れかハ名にしおハゞ
しき月をとりたゝミ

○拾遺愚草

天の代ハ高野の山にすむ月の待らん夜に光りそみえ

為家

○夫木抄

高野山さこそ千とせを契るらめ昔かへる松の陰にて

二品法親王道深

○新葉集

高の山暁ふかく松の戸に光りをそへん法のともし火

竹葉山　たけのはやま　深草山別名　山城

○艸山集十八　竹葉庵十首并引　竹葉山蓋艸山之別称也
余締一笠黄茅住此有年矣近又欲別構一菴而名以
竹葉時〻在其中或禅坐或経行、或讀誦或嘯咏未果
為今茲七月餘暑其(甚)熾因停講習山静日長終日徘徊
脩竹之下葉〻合風清気可掬清興不可言乃信口擬
竹葉庵五言十首云、
屋前竹葉垂屋後竹葉隔屋上竹葉雨後中有愛竹客

立田山　たつたやま　大和　平群郡

社　姫川社

○濱成和歌式
風ふけハ雲のきぬかさ立田山いとふかくもゆきかへりの花
○うつほ物語
秋風のしらべて出る松の声ハ誰も立田乃山とよむらん
○六帖
君とわれと立田乃山の紅葉そハ我ならぬ人見るらん人ならふ
かゝる衣立田の山の萩よりも妹とそ我ハめつらしきせん
秋くれハ紅葉もちらぬ立田山夫とそあとも云のたつたひめ

おなし名の立田の山乃さくら　名に立人あとも又まれなりけん

○大伴家持集

春雨ハふりやしぬなか時雨　立田の山に今やさくらん

かり衣立田の山に何やくもつ里させてふきこし嵐

○藤原元真集

立田山かゝき紅葉を君見ハ秋の錦と折てくれなし

龍田山ことしの紅葉も又ゆきて霧立こもる秋の宮家

○壬生忠見集

何山の末ともしらて散紅葉ハ立田乃山の嵐おそくえん

○大中臣能宣集

秋霧の嵐も尾上も立田山紅葉の錦きたまくさらし

○夫木抄二　康保三年二月堀河院中宮詩歌合猿猴晩景

眺めとていかき立田の山路にハ紅葉の錦里乃せきもる

同　寿

我せこの衣立田乃山中にうつ紅葉し　ちりにこゝ紅葉

○堀河院御百首

立田山かことよのまに夜を寒たゝきて刈し錦まさる二八　肥後

同

立田山峯のさとの里ハわかれと嵐のつてに紅葉とそ立　同

同

錦霧の立田の山乃紅葉をハ晴て坂とそ見えけれ　権僧正永縁

数々誰かしらん紅葉散る立田乃山の嵐のいきを　俊頼

○月清集

秋風の立田山より流れきて紅葉の川をくゝる白波

〇六百番歌合 秋 樹 一番左 顕昭

高圓山弓縁かゝる夜半木立のちの錦に佳絶かな

たかまと山　　高圓山

たかくまとかなれハいふなるをよしとさるにこの圓ハ的といふへく

立又南にて唐の峰のあなたまと的といふしまゝまゝその

高き此山をいはいふされハいつれとも定かなし

〇揚升菴外集四 梁宣帝七山寺賦、神嚻嵐ゝ而獨立仙的皎ゝ以孤臨登之凸凹者曰嚻嚻峯之夫射者曰的會稽有射的山諺曰射的白斗一百射的玄斗一千以為年穀豊登之驗

〇夫木補和歌抄 顕仲 八雲御抄にまとかたのたかまと山と志るさせ給ふハ万葉第六に大伴坂上郎女か歌にまとかたの高まと山にせあれハとふ歌につきて挑云たと思しめして注せさせ給へる成へしよりの歌ハ高まと山の男の

せのなれハとハえさあれハ枕詞にハあらし第二句も七言又泻
あなをとりても矢たきくと云もふ高まと云と續くるにハ
高まと山とつゝけん為の序之口なり 泻まとの矢た
きをつくと云るも亦いつまとかハ見ゆなれハ名方の浦に
つけたるに似たり

高圓山 たかまとやま　　大和添上郡

高圓　野　里　尾上

○大伴家持集
高まとの野への秋はきちりさてハ君かかたみと見つゝ思ん

○堀河院後度百首
高まとの山の峯の白雲ハ言にたなひく心ちこそすれ　顕仲

○夫木抄　万代集
たかまとの山の瀧つせ岩こえて音をたてゝもぬるゝ袖かな　顕輔

高嶋山　たかしまやま　近江国　高嶋郡

たかしま

○万葉集九

旅にあれは夜中をさして照月の高島山にかくらく惜しも

○六帖

たか島の山の桜や咲ぬらん三尾の杣木にかゝる白雲

高間山　たかまやま　石見

○拾遺集

石見なる高まの山の木のまより我ふる袖を妹見らんかも

○袖中抄隣上　右此歌万葉第二ニハ高角山之或木のまよりとあり

せられも同し　又或本をも出せり又ハ打歌の山のとも有れと高

間山とハあらす万葉ニハ作云　柿本朝臣人麿石見国

別妻上来時歌二首并短歌　拾遺ニハ此別妻をはしめのよせなくてハ石見に住ける女のもとに

きたりけるとさへはかりの御事なりて誤りと知へし

又此歌ハ終作の下句を妹見らんかをふる

袖をと有返しておく

○今案に高間の里ハ大和国葛城郡に在けれハ
かくよめり

高山　たかやま　大和国十市郡
香山　香具山の別名也只高山とのみいふハ名所にあらす

○八雲御抄

○万葉集第一　長歌　天智天皇御製歌
高山ハうねひををしとみゝなしと　日
反歌
高山とみゝなし山とあひし時立てみにこしいなみくにはら
三末吉人之
日ハ
高山の霞乃棚毛のきゝ徒雲のいふとしても夜の志けく
作者未詳
日十冬
さよなかに出こし月を高山の峯の白雲かくしてんかも

同十一
まろ田を出きれ嫁ハ高山の岸の鹿菅近くにけんうも
高山の谷のしるへの友ねさへ袖のこほりを忘ると思ふな
高山にたなひく雲のはるはると我か思ふ人を見むよしもかも
自高山（タカネヨリ）いてくる水の岩にふれ我こそくたけ妹にあはぬ夜ハ
高山（タカヤマ）の岩もとたきち行水の音にハたてし恋て死ぬとも

同廿
奥山の岩かけにおふる菅の根のねもころことにふれる白雪
此歌ハ續後撰集冬部に従者井也右大臣とて入
奥と根とを白妙にかへて白雪と引かへたり

同二
かくハかり恋つゝあらすハ高山の岩ねしまきて死なましものを

同三
逆言の狂言とかも高山の岩ほの上に君かふしたる

○名寄補翼抄ニ契沖云今案萬葉第一の天智天皇御製の二首
又第十三に高根さへてうとよめるハ今の本ともにかくやまと
点せり又十一の自高山出てくる水とある歌ハ高根よりと点
せり然れとも八雲御抄に高山大和とて出くる水を注せられし
ものなれハ古点ハたかやまなりけるにや也ハよきにし
是古語にまさに高根さへてうたかやまと續けたるによりて
高くハ先もきをめてたかしきまつといへる林ふかくの山も
多つきなれハ高山とハ社出たるへきなれハたかやまと点すへし
と見ゆ然れハ第一の二首もたかやまとよみて香久山の別名と
かゝんき也但萬葉中に　かく山の歌の外も見ゆるに
吉野の岸ハ雪きえにけりとよめるを見へハ岩本たきちゆく
水といふ上の三文字ハ昔ハかくやまと点してけるを又たか山

のを見し　たまと別　み吉野山の文の名をしんなて　かく山乃
跡とハよめる紀文ハ雲佛掛上又有常清と注せと何そ任れ
たりハ万葉集にも哥詠みつゝ　氏かしき山のこらし
山の名なし　何つれも筑波山とそよめる　おもしとせめるか
是ハ高き山といふ多く　何れともよめるを　こて名所とおもひ
めけるを見え分かし也　何かまへ也　高き山を筑波山とを
いふかなるを筑波山の異名とおもひしめて　日頭に又くれ
しと也しすりて筑波山をいふことゝ注しまへて拾遺愚草に
高山の岑そなしれ　そのみちのあんなのまそなき
○筑筆いたて為ま山をいへ

高田山　　たかたのやま　　非名所　石見　或字
○夫木抄七　建長八年百首哥合　　正二位忠實
せきとめてせかなるまゝ種蒔し　高田の山ハ早苗とるらん
○拾遺集
呼やなけ高田の山の時鳥この五月雨に声なをしみそ
○拾地吐懐編上　今の拾遺の本にハたりまの山とあるを
ハ大和の高天なる時の字の拾芥国に似たるよりまくろ
めく一时のなとりてハ石見に似つりしかあか

うねきの山　衣衣哉といひかけて紀伊の山なるへし考
○金槐集上衣　基のそしめ
衣衣うねきの山の郭公いつしかなかん声をきかなん
たまのやま　手間山　一本手向山
○古事記上於是八上比賣答八十神言我者不聞汝等之言将嫁大穴牟遅神故尓八十神怒欲殺大穴牟遅神共議而至伯伎国之手間山本云赤猪在此山故和礼(二字以音)共追下者汝待取
○今案に手間を舊事記に手向とせり字古似たり

高師山　たかしやま　遠江国
たかしの浦
高師山日本紀略作大谷山これを高しの山と詠り
○六帖
逢ことを二むらさき高師山たかしやむなてみて思ひ
○爲尹
あふら山桜の梢は吹風のなりしもはや庵ちかくなる
○堀河院後度百首　仲實
東路をともにそ見れは蝉の声高師の山は今そ鳴なる
○嘉禄名所　家輔
まろうと高師の山は鳴蝉の声はたかねのことに聞ゆる
○夫木抄十二　仲正

○雲かゝる高師の山のしくれに妻まとふ鹿を庭に聞し

日　高瀬山秋　為相

高師山夕浪もふ塩風にかよひてにほふ秋の声

日廿九　高師山秋　藤原為当

吹おろす芦葉の葉末に露落て都もたかしの峯の松風

日廿六　たかし山をこゆとて　雅有

高師山松ふきこゆる嵐や芦葉の浦のいそ浪の之

日　富士の嶺は高きを限の名にしても高師の山そ名にし勝　慶融

日廿三　高師山こえて見れは浜松の一節高き浦の大松　小宰相

濱名川入塩高し山おろしの高師の沖も荒増るらし

○類聚　基家

高師山松に夕日のかたふきの橋もとらけて月渡る哉

○治所遺藁五　高石山

二十八回行文還道傍草木記吾顔観潮坂後尋
常見今歳始知高石山

高師山　　大江やま　　壺江丑

高師山日本紀詞出ハ高師山也歌よ八よみの中ニ高
師山とよめり伊勢家の語也

○夫木抄

同　　高師山秋　　為相

夕り山夕浪もよす塩風にかをりてさらに鹿の声

同　　同題　　為実

高師山木の葉の下葉かくれて鹿の声織る峯の松

同　廿三　　為兼

大江山かたふく月のかけさえて濱松の入海にけて浪そさわく

同　廿九　　高師山秋

吹おろす楢葉の葉に露落て都もたかしの峯の秋風

ゝかゑりみてやまさいつし高世山夜半のうきの床はあやしとも

田上山

たなかみ　大和かみやま

田上川

○万葉集 長歌

衣手のたなかみ山に真木さく檜のつまてと

○同十二

ゆふたゝみ田上山のさなかつらありさりてしも今ならすとも

○拾玉集六　邂逅遇恋

あひ見すはまし待しの久しさハたまさかにあふもなかなかわひしきん

高砂山　　たかさこやま

○名寄　　　　　　　　　　　　播磨国

康和二年宰相中将家寄秋の歌

海の声高砂山のこたかきを千尋の底のあゆみ見えたえん

鷹巣山　　たかのすやま

○新撰菟玖波集二　春下　　筑紫にて

まれなるさへ難波の声さへん

生きまし鷹巣山をめたらけて　よき人志らまし

鷹尾山　たかのをやま

○万代集　　　　左京大夫顕輔　○夫木抄五

みかりする　鷹狩哉

鷹尾山に立雉や君か千とせのひつきなるらん

鷹尾山　たかのをやま　近江

○懐中抄

み狩するたかのを山にたつ雉子も千世のひつきの初なるらん

高雄山　たかをやま　山城

高雄寺

○夫木抄　　為家

こけのむすはての岸根高を山手折られてうつる岩つゝし哉

為実

高を山峯のはての花つゝし折てそみするさとのまへ

成光

み川瀬の都のそらたゝゆふは高をの山のみ井は流れり

為家

老の坂ゆふ坂こえて高を山なをきいそふ花しるへせよ

立山　たてやま　越中国

○諸州採薬記　越中国より加賀の方へかゝり行ハ比竒之文
綱橋あり此ハ七十六艘を鎖にて並へ一の舩橋とす　同所立山行
峠寺より立山之行所ハ社僧数ヶ所あり坊堂　五百間計此堂西向之
又加州より東方儀究（但ゐ年）の浮年ゝ安附有りと云前ニ之の浮
橋有長サ五百間横五百年　ゟ木ニ大きなる板の落来有十
三君めくると云所有　大木之浮橋之古寺有り
浪高く流る　限もなし　再なきもの也　それより人ハ三えつる
讀人不知　此所より立山本社権現迄大難所之九里半余と
又も十三里程有　去り谷此急道より木の根を取て断し行
所数ヶ所有りその外所々より腰丈ヶ何へ入る所ハ雲所之又之
き正明川と云所長サ廿六間の綱の橋行ハ法来集語
の者大人の内八九人ハ此所より帰り候と云所之読人此

夫より極て峻く依て此名有り此の剱稀成鐡て作て雖弥の雪
を踏みて五里程行又望を立たる所あり所を壱里ばかり登りて
上て立山権現の堂あり社の右に東南の（方弥陀中宮此所より東）
の方に日光山見へ南の方に信州浅間山飛州乗鞍山なと（荒神不動あり）
の南山是慈興上人大宝元年より元文五庚申年まて
千四十有余年に成と云此所の宝蔵に鏡あり其外山中にて
壱里程の所を過ぎ温泉湧出る所を立山の地獄
と云余諸の人を迷して跡を止めしむ又山中に鶏と云鳥あり
雉子の鳴に似て鶏冠ありて見へると此山の名鳥と云立山
の峻難なる事富士へ十度登るより立山へ一度登るは労し
労すと云只雪の山上へ行なしと云六月十日八日
口南口まで平時山中に居りて今年は俗年と遠い事
挑つよき人は覚出り此若山上の雪深き中壱文口元入よろし
氷をあきむるは雪を器に入大を賞翫して多く食し一夢深き

水を飲むはひやかに何と煮ても出入炭の食物は只糯米子
等の物持て登る路は嶮難の地にして深き雪踏其苦は
一日のうちに消る事なしといふ

大山　だいせん　伯耆国

〇太平記曰　後醍醐天皇遷幸隠岐国事　比は盛の山川を
杉坂越て美作や久米の佐羅山さらゝに今はあるへき時な
らぬに雲間の山に雪見えて遥に遠き峯あり御警固
の武士を召て山の名を御尋ありけるに是は伯耆の大山と申
山にて候と申けれは暫く御輿を停められ内証甚深の法施
を手向させ給ふ

霊山　りやうぜん　山城国

〇洛所遺藁八　遊霊山叙　安氏伯元子需酒食於霊山既
而数子各就于列　余實愧然其中矣且告曰吾子吾子聴
余言之瑣々耶夫洛之諸山甲天下也措而不論東山復
諸山之甲而其最甲秀東山者非茲山乎南山之廟愛宕
之山洛陽之十万戸杳靄景象之美萃在坐客俯仰之中
時維二三月之交和風吹物鳥語欣々桃花如浪山櫻如雲
有名之樹無名之艸芬郁紅紫無不一物得其時矣況
伯元子之酒旨而多伯元子之食醇而香筆硯在右棊局
在左且夫勝地在（若）此良辰若此酒食亦若此則今日之遊不
可謂非樂樂也然惟有是而已無奪激之心無善名之可傳

則戰而揃鬚翁而終其生而已烏虞兹山之久也不可知焉人之登茲山也其多矣復不可知焉然不聞切名文章之傳今日矣羊叔子峴山之歎可弗按哉悲夫余及叔子若不免揃鬚終生之類由是思焉嚮之可樂樂者皆為我感傷之媒雖然知樂樂之可羞者則余及叔子耶亦能擴充之而後可得全其所以樂樂之為樂樂之和辛酉二月二十五日

○そ字部

曽乃原山　そのはらやま　信濃國伊奈郡

曽祢原

○大伴家持集
その原乃山をといくかとおもひくまた君も我身もゆくへしらずや

○夫木抄
そくさ刈その原山の木の間よりみかくれ出る　秋の夜の月

袖振山

○續後撰集五 秋上　そでふるやま　布留山同所也　大和国 山邊郡

こゝにまねく野べの風にをとめこが袖ふる山は秋やきぬらん　後鳥羽院御製

○夫木抄曰　百首御歌　光明峯寺入道摂政

白妙の袖ふる山の春風に花をしらむこゝ○の三月

建保四○内裏十首歌合　従三位範宗

花の香は何とやさそふをとめこが袖振山のうくひすの鳴

をとめこが袖ふる山の垣の久しき世より思ひそめてき

○勝地吐懐編上 此歌は万葉第四又十一の巻 第

十三石上布留山と讀これは只かけて袖ふるなと

けて山邊郡布留の外に別に袖ふる山といふ所なし 何ふまて

○津字部

敦賀山　つるがのやま　越前国　敦賀郡

濱　郡

むかしハ角鹿と書てつのかとよめり万葉集も

○名寄

わすれゐるそらそ越路[illegible]らの山の岩のうへにも　隆家

○夫木抄　兼昌

ひかれゐる猿とやみる　かへる人のつるね山のふもとのしをちを

大和

都祁山　つけのやま

○續日本紀六　元明天皇　霊亀元年六月庚申開大和国都祁山之道

をの神　めの神　筑波ね　川

常陸国　筑波郡

筑波山

しゝま山

つくはねはしゝま山といふと式にはしゝま山をいふは同書のかなし
なり新撰万葉集の筑波山乃哉拾遺集に又のせられ
たるにはしゝまの神のとそを信明集もしゝま山とあ

○源信明集　しゝまやま

君をつく君に心をしゝま山には雲井によそにしやうの郎

○新撰万葉集

廉嶋成筑波の山之筑々砥吾身一丹恋繁積

○今案此歌を拾遺集にのせられたるには第二の句筑波の山をしゝまの神とそ結をつむかはと有り

○拾遺集

廉嶋あるしゝまの神のしゝくゝと我身ひとつに恋をつみしゝ

○採地吐撰論上 筑[麻]山 麻嵯なる――
右此歌ハもし萬葉ニ有て筑波の山のとあり波
と麻と同韻なれハ通はしけむ之ハ筑波のこと也
して僻て別を立たるハ汲[波]明集も名寄の歌ニて
同山 篇を入て――
○今案ニ此書とせるハ数字名寄歌ニ家集のあやまりを
正して也 せめて波明ハ表を寄の[illegible]――
○常陸国風俗歌
つくは山 はやましけ山 しけきをそ たつこかよふ やまかよ
へる我妻ハ志りて
○万葉集九 長歌二首 三 十一 十二
十七首反別出

○源吟集
筑波山 咲る桜の匂ひをは 入て折らねと よそなからみつ
○曽丹集
つくは山 はやましけ山 しけれと 降雪ハさはらさりけり

○ね字部

根山　祢やま　　班谷水

根山ハ夫木抄に摂津国と志るし又名所方角抄にハ
いつれの国ともいはす勝地一覧ハ班谷水のよしと志るせり
思ふに根ハ元の略にて峯山といふへき也

○良玉集　雅　　孝善

ね山ころ(?)の男乃そ(?)何ゝにもあらぬ(?)なきを哉(?)

○散木集

時鳥根の山乃椎柴にかくろへて(?)なかむ(?)都とつけよ世々

○新撰六帖

そよやきけいつくね山の時鳥　なのりしつてそ来ぬ(?)さりける

○拾玉集
秋も昔の猿ハなくそのを猿山のよそに叫声きくらし
○夫木抄　十三　文治の比ひえの山より寂蓮法師のもとへつかはしける十首のうち　慈鎮
少女袖の露ハ深きもあはれとや猿山の猿のなきを聴こゝろ
返し　寂蓮
雄鹿なく川しゐ山乃猿なれと少もと袖そ露にぬれぬる

同　家集康
秋の野を猿山の猿にならして袖にかゝるなさを廉の声

同　家長
嵐の雲かさねて白き夕霧に鳴根山の猿乃一こゑ

同廿　行家
つれて秋猿山も声ハぬ白雲のさきの世もうき身の哀哉

同　常盤井
雄鹿なく嵐の声も秋風に根の声のみハたえはてき

○奈字部

奈良山　大和國久世郡　ならやま

都里　小河

○演成和歌式
喜撰とハあつし山の白妙にこそしつかにハいふ雲かな

長谷山　はつせやま　山城国

長谷をはせと訓は大和国泊瀬と申して是亦同
字別今の所也　是は山城国鞍馬のこなたに在藤原公任
卿の隠居の所也

○夫木抄　藤原公任

人のすむ谷山をたつねきて志ら雲は何しとてあらん

同　信実

見渡しの景色やしけりは黄なるてはせ山はあらしふくなり

連庫山　なみくらやま　近江国

○壬二集　家隆

思ふ人ありの里何らは五月雨のなみくら山もよそにたにこそみん

○去秋詠草

君か代は千重の　並　なみ之藏際もなく作りかさねよ椿の村人

岩越山　いはこしのやま

○夫木抄廿　喚子鳥　題読人不知

三か月の岩こしの山のよふこ鳥おもはぬかたに人のこゑきこゆる

長峯山　なかとねやま

○夫木抄 廿

はるの日は北も峯山の桜山かきなす雲の末そなかりけり　永仁大嘗会　俊光

なからの山

○後撰集 第二 春中　桜花をよめる　よみ人しらす

吹風をなからの山の桜花のとけくそ見るちらしと思へは

○同 廿

吹風をなからの山とは風となかると見るなりけるを

並の名はなかしなかしの山名なりと

長等山　なからやま

○千載集　近江守

さゝ浪のなからの山のなからへは久しかるへき君か千代かな

○拾遺集

さゝ波やなからの山のなからへて名を持つのかなは~~ゝかや~~

○夫木抄 廿

君か代はなからの山にいつ松の千とせにちらぬ花の咲まて　雅輔

同

秋の日もなからの山のもみち葉は大津の里のかさしとそなる　隆祐

夏山　若狭にあり

〇六百番歌合　夏草　十二番右　定家

夏山の草葉のしけみ志られぬる末にしも私人しらましハ

〇同　夏　以上　廿六番右　定家

雲井よりひゞきやすらん夏山の嶺より高き蝉のもろ声

廿七番右　中宮権大夫

夏山の木のしたかけひろくなりて一声まさる蝉のもろこゑ

〇中務集　堀河中宮のおふくきの歌

夏山のしけみをわけて鳴鹿のいそぎてのひとりねなるらん

名草山　なぐさやま　紀伊国名草郡

名草の濱同所也

〇万葉集七

名草山ことにしありけり我恋の千重のひとへも慰さめなくに

那智山　なちのやま　紀伊国

なちの高ね

那智濱同所也

〇夫木抄巳　花山院御歌

石はしる瀧にまかひて那智山の高ねとみれハ花の白雲

長柄山　なからのやま　近江国

○夫木抄

よろつ代ハ長柄山のなからへてつきすそこなんこゝろつきぬれハ

奈古曽乃山　なこそのやま　陸奥国

名こその関同前と

○夫木抄廿　亭子院御時歌合　貫之　家集

をしめとも落りもゆかへ散すきを名こその山の関もとめなん

那智山　なちのやま

○金槐集下

見熊野の那智の御山を引志ありうちこえてのこ詠る歌

冬こもり那智の嵐の寒けれは苔の衣のうすくやあるらん

国立公文書館
National Archives of Japan